

アジア女性

交流史

研究

第十号

一九七一年九月

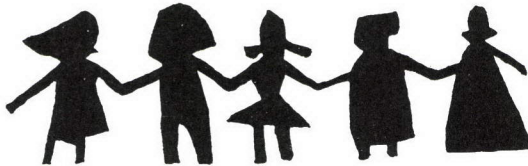
責任者・山崎朋子
カット・中山正美、金沢桂蘭

36頁

アジア女性交流史研究

No. 10

1971.9



発行所・アジア女性交流史研究会
 (東京都目黒区柿の木坂2-5-3)
 山崎方・電話 718-1584
 責任者・山崎 朋子
 定価・100円 送料・35円

子曰、学而時習之、不亦說乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不愠、不亦君子乎。

先生がいわれた、「学んでは適當な時期におさらいする、いかにも心嬉しいことだね。(そのたびに理解が深まって向上していくのだから。)だれか友だちが遠い所からもたずねて来る、いかにも楽しいことだね。(同じ道について語り合えるから。)人が分かってくれなくても気にかけない、いかにも君子だね。(凡人にはできないことだから。)」

子曰、温故而知新、可以為師矣。

先生がいわれた、「古いことに習熟して新しいこともわきまえれば、教師となれるだろう。」

子曰、学而不思則罔、思而不学則殆。

先生がいわれた、「学んでも考えなければ(ものごとは)はつきりしない。考えても学ばなければ、(独断におちいって)危険である。」

席不正不坐。

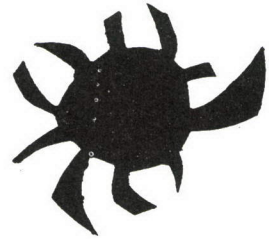
坐席が正しくなければ坐らない。

『論語』金谷治訳

	米		
三	■ アジアと日本のナショナリズム	山 辺 健太郎	2
三	■ 日本の朝鮮支配と吉野作造	岡 部 牧 夫	10
三	一ひとつの仮説として一		
目	■ わたしが日本人であること	梅 谷 朋 子	17
次	米		
	中国民謡・出稼ぎ女の唄	安永寿延 他 訳	16
三	米		
三	■ ある八路軍とともに	石井出 かず子	21
三	一連載・その1一		
	■ ある満蒙開拓少年義勇隊員の記録	新 舟 玄三郎	27
	一連載・その7一		
		差別と戦う若者たち・山口明子	36
		カット・中山正美・金沢桂蘭	

アジアと日本のナショナリズム

山 辺 健 太 郎



ナショナリズムという言葉はどあいまいなものはない。政府の失業統計にでてくる失業者の定義のようなもので、この定義の仕方によって失業者の数はふえたりへったりする。ナショナリズムの定義もそういったところがあつて思ふ。

試みに、『日本近代史辞典』の「國權論」という項目をひくと、明治初年の思想界で朝野「いずれも日本の國權を確立し、弱肉強食の國際社会に独立の地位を保つことを目標としていた。一八七七（明治一〇）年ごろに自由民権運動が盛んとなり、朝野の対立が激化しても、この点に關するかぎり、朝野ともに同じような見解を示していた。ただ、民権論者にあつては、國權の主張が民権の主張と結びつき、むしろ後者を中心に考えられていたのは注目に値するが、民権運動の敗北とともに、民権思想から切り離された國權論が支配的となり……とでている。

この國權論というのがナショナリズムに相當するように思ふ。そのほか民族独立と民族

統一、民族主権確立の運動とこの指導理念のようなものをナショナリズムという人もあつた。

ところが、日本では民族独立や民族主権確立の運動は幕末のころすこし顔をだしたくらいで、明治になってからは、この國權論的な主張の方が多かつた。もつとはっきりいえば侵略主義で、明治以来今日まで日本の対外關係のなかで唱えられた大アジア主義にしても大東亜共榮圏の思想にしても、みな日本の侵略主義の別名であつたことは、事實が証明している。

それで私は、まず日本の侵略主義と朝鮮問題について論じたいと思ふ。このことで問題になるのはいわゆる征韓論である。

征韓論というそうとう大きな懸論が一八七三（明治六）年前後から日本政府内にあつたことは間違いないが、征韓をめぐる内閣内の意見の違いは、当時の閣議記録を見た人がだれもいないので、正確なことはわからない、といった方がいいと思ふ。

だいたい征韓というふうな封建的な領土擴張主義の考えは、当時の閣員はもろんのこと、失業士族の大部分がもつていた。

一八七一（明治四）年に廃藩置県が行なわれて、旧幕府以来の藩がなくなつて、中央集権的な明治政府の府県となり、藩主のかわりに政府任命の知事がおかれた。

翌七二年の一月には徴兵令が公布され、世襲の職業軍人ともいふべき武士の大部分は失業したわけであるが、これら二つの改革で職をうしなつた藩士は約六〇万、家族をいれると三〇〇万人にもおよんだといわれているこの藩士たちは、農業もやれば商工業をやるにしても資本がなく、ただ売り食いの生活をつづけていた。

この連中がいわゆる不平士族で、対外戦争を待ち望んでいたことはいふまでもない。當時の日本では、この士族たちが國民中の知識階級であり、世論の指導者であつた。したがつて、この士族たちの考えが國民に影響をあたえたものである。

征韓論にしても、征韓そのものについては政府の中で意見の対立はなかつた。ただ征韓の時機についての意見の違いはあつたらしいことから、内治派とか征韓派とかいう対立ができたのである。ただ時機の問題だけであつたのでは、近代對立ができるはずはないので、對立の根は、近代的軍隊の編制とか地租改正とかいった内政問題だつたと私は思ふ。

しかし征韓ということとは不平士族の心をと

らえ、これがだんだん國民の心をとらえたものである。こうして征韓論というのが形成された。このようにして「征韓論が喧しく主張されるにいたるや、ここに俄かに色めきたつていたたのが実は士族下層のひとびとであった。彼らは前述のごとく版籍奉還、廃藩置県を経ることよって永年その有し来った由緒ある地位を喪失したことを甚だしく不満とし、又上記のごとき身分上の差別の単純化を深く憤り、更に又徵兵令の発布によって武事の独占者としての伝統的誇りを奪ひ取られたことを悲憤し、しかも、後述のごとく彼らの極めて多数のものは経済的窮乏へと陥りつつあったが故に、かかる彼らは明治新政府の成立以後時とともに非なるその運命に対して悶々の情堪へ忍び難きものがあった。それ故に今このように征韓論がしきりに唱えられ出すにいたるや、彼らは韓国との戦争がその暗き運命の前途に何らかの光明を点じて打開の途がそこにひらかるべきことを激しく期待して、この征韓論を支持するありさまとなつた」という、岡義武の主張は正しい。

朝鮮問題にかんするかぎり、日本のナショナリズムは、時代によって形はちがっても、本質はいつも「征韓論」であつた。

武力による征韓は、朝鮮の宗主国としての清國のことを考えるならば、当時の日本の実力ではとうていできなかつた。日本はまだ外征できるだけの武力はもっていなかったのである。したがって当時の閣員中の征韓派がほ

んとうに征韓を考えているとしたら、この連中は低脳児にひとしい。彼らはほんとうに征韓を考えただけだとはなく、政府に対する難題をもちだしただけだとは私は思う。

征韓論の主張がやぶれて内閣を去つた板垣、副島等が下野してのち政府に要求したのは、民選議院設立の建白であつた。しかし民選議院の設立を要求する思想と征韓というような侵略主義の思想がどうして結びつくのであろうか？まことに不思議である。

ここに日本ナショナリズムの特徴がある。日本では、ナショナリズムはいつも侵略主義と結合していた。

征韓論に反対した大久保利通にしても、一八七四（明治七）年には、台湾遠征をやつてゐる。この台湾遠征は、「小なる征韓」の実行にほかならない。つまり台湾遠征によって不平土族の気分転換を、政府のいわゆる内治派という反征韓派がはかつたわけである。

そのつぎの征韓が江華島事件で、これも日本政府の内治派がやつた。これは、牛莊までの航路測量の命をうけた日本の軍艦雲揚が釜山をへて江華島の沖にきたとき、艦中の淡水がたりなくなり、水をもとめる艦載のボートをおろして漢江をさかのぼろうとしたとき、江華島の砲台から砲撃されたので、ただちに応戦してこの砲台を破壊して江華島を占領した事件であつた。

しかし、今日わかっている資料からいっても、この淡水欠乏というのは全然でたらめで、

この事件はまったく日本側の計画的な挑発行為である。『自由党史』のなかでは、板垣退助は、はじめから雲揚艦の派遣に反対していたよなことを書いてゐるが、これも実は大うそで、板垣は、この挑発的な軍艦派遣のことを政府の一員として知つてゐたという証拠もある。この事件も、征韓論が起つたところは征韓については政府内に意見の違ひのなかつた証拠といえるだろう。こうしてはじめてから計画的に朝鮮の砲台が砲撃するような事件を挑発しておいて、この事件の交渉で、とうとう朝鮮を開國させたのである。

このころは、まだ全国的な世論は形成されていなかったが、政府のやつたことに反対するものはいなかつたことがいろいろな資料からわかる。事件の真相がわかつたのはだいたいぶあとのことで、たとえば徳富蘇峰の書いた『公爵山県有朋伝』には、「この時の雲揚艦々長の井上良馨はかねてから征韓派であつて、航路測量というのには単なる名目で、じつは海軍首脳とひそかに默契するところがあつたのだ」という主旨のことを書いて、この事件は日本が挑発したことを認めてゐる。しかし当時は政府発表の方が一般に信じられていたため、世間の「朝鮮討つべし」の声はたかく、政府の不正手段は全面的に支持されていた。

これからのち、朝鮮問題については全体の傾向として、政府の意見よりも、民間の意見のほうがいつも強硬であつた。しかし今日わかっている資料によると、そのころから政府

は着々と軍備をととのえ、大陸侵略の遠大な志をたてていたことがわかる。桂太郎は日本の軍制確立のためドイツに留学しているが、この桂は、一八八〇（明治一三）年に支那遠征謀略という意見書を陸軍卿あてに出しており、このころから日本軍隊は大陸遠征を目ざしていた。

大陸遠征の目標をもったといっても、後年のように、直接中国大陸へ侵入する考えは当時なかったらしく、またその力もなかった。例えば、一八八〇（明治一三）年に山県有朋と西郷従道とが連名で出した意見書によると、海軍が参謀本部をもつことに反対し、海軍は従であつて戦争の主体は陸軍であるべきだと力説している。このことも、当時の日本軍閥が直接中国を侵略する意志のなかった証拠といえよう。

当時は清国の方が日本よりも軍艦の数も多く、武力で日本が清国に勝つとはだれも思っていないかった。そんな時代に日本が朝鮮に侵出しようとしたのは、清国の朝鮮にたいする宗主権が名目的なもののように日本には見えていたためである。

しかし清国はまもなくその朝鮮政策をかえて、宗主権行使にのりだすことになった。そのきっかけは、いわゆる壬午軍乱であろう。壬午軍乱というのは、一八八二（明治一五）年におこつた軍隊反乱であるが、これを大院君が扇動して反閥、反日の暴動にしたものであつた。この事件のまえから日本は朝鮮の軍

事改革を指導するため教官をおくつたりしているから、清国が日本の野心を注意しないはずはない。しかしこのことで日本に抗議するようなことはなかった。

しかし壬午の變で日本の公使が公使館の建物に放火して、仁川から日本にのがれ、やがて、日本がこの事件の交渉にのりだしてからは、清国はただちに朝鮮に出兵し、日本との妥協を朝鮮政府に命じ、その障害になる大院君を軍艦にのせて天津につれ帰り、これを軟禁してしまつた。

この事件をきっかけに日本の朝鮮にたいする関心は異常にたかまり、壬午軍乱にかんする錦絵や、絵入りのパンフレット等がたくさんでている。日本は排外主義、朝鮮征伐論の一角でぬりつぶされた感じであつた。この世論の形成と征韓をおもひたてたのは、いわゆる民権論者である。

朝鮮問題にかんして日本のナショナリストあるいは国権論者たちは、この時以来いつも政府の消極策を攻撃するようになった。しかし政府の消極策というのも、じつは表面上のこと、うらでは着々と清国を仮想敵とする軍備をととのえていた。

この時代に国権論者は武力によって朝鮮を征服せよとの意見であつたが、福沢諭吉だけはすこしちがう。彼は、「日本人は隣国（朝鮮）に金を貸して先づ自家の事業を忙はしくして至当の報酬を取り、又従て其貸金元利の返済をうけるものなれば、一挙二様の利を占

る者と言ふ可きなり。又或は右の如く資金を利用して、其金より生ずる直接の利益は之を論ぜざるも我国人をして地位を朝鮮国に得せしむるの利益は特に大なるものある可し」と書いているし、また朝鮮には大いに金を貸して、この金の抵当として朝鮮をとれ、といったようなことも書いている。

武力によらず朝鮮をとるといふ一点では、樽井藤吉の大東合邦論の主張とまったくおなじで、政治的ルンペンであつた樽井の主張が空想的だつたのにたいして、福沢の意見は、資本主義というよりも、むしろ金融の帝国主義の朝鮮侵略ともいふべきであろう。したがつて、当時としては、樽井、福沢なその意見も日本ナショナリズムの動向に反対するものではなかつた。こんなわけで、日本の朝鮮侵略は国内世論の支持激励はうけても、反対されるということはなかつたといつていい。また、満州事変以後のように、政府が宣伝して世論の形成をはかる必要もなく、以後日本ナショナリズムというのは、侵略主義といつてもいいくらいに変質してゆく。

同時に、清国の朝鮮にたいする宗主権のことと問題になり、このころから日本の世論は清国の干渉から朝鮮をきりはなし、日本が朝鮮を単独で支配するための「朝鮮独立論」あるいは「朝鮮改革論」といったようなものがあらわれる。これを皮相にみると、日本のナショナリズムが、朝鮮の近代化を支持したようにみえる。

日本ナショナリズム美化のこのまじかだった意見には、浅薄な歴史家の研究も大いにその責任を負わなければならない。たとえば一八八五（明治一八）年の自由党大阪事件にしても、これを「民間志士の朝鮮改革運動」といってその侵略計画をごまかしてきた。

自由民権運動が弾圧されて、日本国内の民主主義運動がおとろえてからは、国権論すなわち侵略主義一本になったといっている。この点は、はじめに引用した『日本近代史辞典』「国権論」の説明するとおりである。

一八八四（明治一七）年の甲申事変というのは、日本と清国とが朝鮮の支配権をあらそった最初の衝突だったといっている。これはそのころ清国とフランスとが、いまのヴェトナムをめぐる戦い、清国がフランスからやられ、弱体化したとき、朝鮮から清国の勢力を一掃しようとして、日本が朝鮮で策動した事件であるが、これは優勢な清国軍のために日本がやぶれてしまった事件である。

一八八五（明治一八）年には自由党大阪事件というのがおこっているが、これは日本のナショナリストが国権拡張すなわち侵略主義の立場から、武力で朝鮮に侵入しようとして失敗した事件であるが、朝鮮への武力侵攻の名目は、朝鮮の民主的改革をたすけるということであった。日本国内の民主的改革もやらないで、他国の改革を武力でやろうとするとはナンセンスもまたはなはだしい。

この事件には女性として唯一人影山（福田）

英子が参加していたが、英子はこの事件の準備段階で、事件に関係した男たちが、強盗等の手段で集めた金を、酒色に費やした事や男女関係の腐敗に疑問をもちはじめ、のちに婦人の解放は社会主義でなければならぬと自覚するようになったキツカケとなったことでも有名である。このとき、獄中での回想等をもとにした影山英子の自伝『妾の半生涯』を見ても清国への蔑視観がみなぎっていることは興味ぶかい。日本のナショナリストの清国に対する態度がよくうかがえる。

一八九四（明治二七）年の日清戦争というのは、甲申事変で失った日本の勢力を挽回しようとしたのが一つの原因であった。この戦争の動機になったのが、朝鮮におこった農民戦争でぶつう東学党の乱といわれている。この農民戦争を朝鮮政府が鎮圧できずに、清国に出兵を依頼したため、日本もこれに対抗するために出兵し、結局このときの日清の対立が両国の戦争になったわけである。

この東学農民戦争のときに、たまたま朝鮮の釜山あたりにいた日本のナショナリスト、つまり玄洋社の大陸浪人たちが、東学軍に参加したという伝説が伝わっているが、これはまったくデタラメである。彼等の行動を後から書いたものを見ても朝鮮人に対する蔑視はじつにひどいもので、彼等は日本と清国との対立を激成しようとした意図はあったようであり、日本の国威があがったのは、日清戦争で

日本が勝ったため、その日清戦争の原因が「東学党の乱」であるが、この「東学党の乱」に清国が出兵したのは、この乱に日本のナショナリスト（彼らのいう天佑使）が参加したことを清国が知っていたためである、といって、自らが日清戦争を挑発したのだと自慢している。

しかしながら、日本は日清戦争には勝ったものの、つぎにロシアが朝鮮に進出してきた。このロシアと日本との対立が日露戦争になったのだが、その前に、正確にいうと一八九五（明治二九）年に、朝鮮宮廷内の親ロシア派の勢力を一掃するために、ソウル駐在の日本公使三浦梧楼と熊本の国権党の朝鮮浪人とが組んで、宮廷に押し入り、王妃を殺した事件がある。これもナショナリストのやった侵略行為であるが、彼らはいつも軍部と結びついて大陸で侵略のお先棒をかついでいた。

こういうふうに、アジアの半植民地であった清国については、日本のナショナリストはこれを助けるための運動は少しもやらず、ヨーロッパの強国といっしょになって、清国を侵略する側にいつもまわっていた。

日清、日露の戦争に勝った日本は、アジアの最も有力な国家となるにつれて、日本のナショナリズムの侵略的気性はだんだん強くなってきたのである。この時代のイデオロギーが大アジア主義である。

この状態は日本による朝鮮併合までつづきこれからの日本は、中国侵略を目ざすよう

なった。この時代の思想的武器が「大アジア主義」であらう。

この「大アジア主義」は、いつもアジア解放論とむすびついているから、だから朝鮮問題でポロをだすのである。日本は朝鮮の植民地支配を強化しながら、アジアにあるイギリスの植民地だけの解放をさげふ。これはちょうど、朝鮮を支配するために、朝鮮の清国からの独立をとなえた往年の日本の主張とまったくおなじものである。

この「大アジア主義」は、こんどの太平洋戦争中に極点にたっし、つぎのような主張となつてあらわれた。

「日本の民族指導及び統治の理念はこの英米蘭の人種の優越に基く搾取的植民政策と異り、八紘為宇の大精神に基き原住民をして各能に応じ分に従ひその処を得しめ、進んで自然に中核たる日本の聖業を輔翼するよう導き、かれらをして大東亜興隆の榮譽を相俱に享受せしめんとするにある。従つて英米蘭の如き民族的優越感や外形的權威によりその統治民族の優秀卓越を得得せしめんとする統治方式と異り、日本人は日本の道義感により英米蘭の愚民政策に対し積極的転換を行い、原住民をしてアジア的意識を覚醒し、東洋の道義的信頼を獲得し、日本に対する尊敬を捧げしめることが肝要である。かくして、日本民族の優秀性をかれらをして体得せしめることによつて、信頼と尊敬を勝ち得べきである。

日本國家の武力の優秀卓越は大東亜戦争そのものにより、原住民に対して明確ならしめた。そうして、又、今後もこの戦勝によつて、日本に対する信頼と尊敬との意識を明確ならしめねばならぬ。

日本國家の優秀性を証明すべき窮極の道は、専ら戦勝にある。従つて、日本國家の優秀性を会得せしむべき大道は、区々たる宣撫や片々たる啓蒙の方策ではなく、帝國の戦力増強と作戦の遂行とに原住民を全面的に動員協力せしめ日本が勝つにある。従つて現段階において日本の優秀性を会得せしむべき統治の方式は、全般的な各種施策の平均的推進ではない。統治地域の人と物とを挙げて重点的に戦力の増強に活用し、日本が戦争に完勝することこれ自体にある。そうして又、原住民が凡ゆる困難に堪へ犠牲を忍んで大東亜戦争を勝ち抜き、大東亜共栄圏を建設し、日本の完勝によつて自主的な民族向上を達成せしめることそれが現段階の民族指導の原理である」（平野義太郎著『民族政治の基本問題』二九〇—三〇ページ）。

ここにはもう朝鮮問題は一つもない。朝鮮は完全に解放されたという幻想のうえに立つた議論である。

「大アジア主義」を歴史的にみると、これは日露戦争後におこつた日本ナショナリズムの一変型である。したがって日露戦争後日本

が朝鮮を併合してしまつてからは、朝鮮からさらにすすんで、アジア全体を侵略する思想的武器が大アジア主義だから、日本のナショナリズムでは朝鮮のことは問題にならなくなつた。

ただ朝鮮のかわりに、全アジアが日本の侵略すべき対象となる。日本のナショナリズムは、大アジア主義となり、さらに「大東亜共栄圏」となつて自ら崩壊したわけである。

征韓論以来の日本の侵略主義の発展がイデオロギー的に表現されたのは右のようなものだから、日露戦争後に、ナショナリズムのうえで朝鮮が問題にならなかつたとしても、本質はおなじで、その歴史的規模がかわつて大アジア主義となり、大東亜共栄圏となり、対象が朝鮮から全アジアの侵略に発展したものである。

朝鮮と日本のナショナリズムは以上のような事であるが、次にロシアとの関係の問題に移ると、日露開戦の前に国民世論を開戦に導いたのは、七博士という七人の法学博士で、彼らが盛んに開戦を唱へたことは有名であり、あの時の戦争反対は、平民新聞によつた社会主義者だけであつた。しかし、この日露戦争の時の平民社の戦争反対の運動は、やや誇大に伝えられた傾向があると思う。これは何故かという、今日のような平和運動と違つて、当時の平民社を中心とした社会主義者の平和運動は、ごく少数者の運動で、大衆を反戦平和の運動に動員することはなかつたか

らである。この事は、当時の平民新聞に早稲田中学の学生の投書で「人々が皆、戦争に熱狂する時に、一人反戦を唱えるのは愉快な事である」というのがあることからもわかる。つまり、大衆とのつながりなど考えていなくて、選ばれたる人の平和主義、反戦主義であった。したがって、大衆的な力になり得なかったから政府もたかをくくっていただけの話で、漠然と平民社の反戦運動というように手放して評価することはできない。しかし、同時に反戦の気分が各方面にあった事も事実で、

例えば、平民新聞の日露開戦の時の新年の挨拶に第一番に来てくれたのは、麻布連隊の制服をきた兵士だったという。制服の兵士が平民社に年頭の挨拶に来るといふ空気があった事も間違いない。それとて軍隊の中の選ばれた人であった。当時の軍隊の規律は、戦争中のそれとはだいぶ違い、とにかく日本の資本主義の上昇期でいわば国力に余裕のある時期だという事がすべてに現われていて、例えば捕虜の待遇も、国際法からいえば当り前のことではあるが、大平洋戦争中の虐待とは比較にならない状態であり、そういう中で兵士の運動なども寛大に扱われたと思われる。当時は、ナシヨナリストの開戦論が世論全体を指導していたが、ポーツマス条約の結果一般国民が予想していたような戦争の分け前がなかった。樺太の南半分を取っただけだという風に期待をはずされた国民の講和条約に対する不満がたかまってきたわけで、その結果が戦

争継続・講和条約破棄の日比谷大暴動になった。これを指導したのは、皆当時のナシヨナリストであった。この様に日本のナシヨナリズムは、侵略主義と結びついていたのが大きな特徴である。

日露戦争の結果、日本が満州を取って大陸侵略が始まったが、その先頭に立ったのはいつも日本のナシヨナリストで、そのナシヨナリズムが日露戦争以後、ようやく中国を対象とするようになった。中国の動向と日本のナシヨナリズムは複雑な関係にあって、例えば孫文のように本当に中国の解放を考えた人間が、日本の右翼のナシヨナリストと提携するという事実があり、日本のナシヨナリストがある程度の応援をした事は間違いない事である。しかし、孫文の運動を応援した日本のナシヨナリストは、決して民族解放の理想を持っていたわけではなく、結局孫文を助ける事によって、日本の勢力を大陸に扶植しようという野心を持っていたので、根底はアジア侵略の思想だったのである。この侵略的なナシヨナリストが孫文らの運動と結びついて、その運動の性格を非常に複雑なものにしていった。

もともと孫文の算初の出発点は、滅満興漢、つまり満州族である清朝の支配を倒して漢民族の政権を打ち立てるといふものであった。彼の三民主義という考えはかなり後になって出たものである。大正元年、今からちょうど六〇年前の辛亥革命には、日本のナシヨナリ

スト達がそれぞれ参加したり応援したりして孫文も日本でこれらの人々と交流した。しかし、この運動が国民革命の成功した一九二七年代になって日本の帝國主義に脅威を与えるようになってくると、ナシヨナリスト達の参加はまったくなくなり、この点では政府と完全に一体となっている。これをナシヨナリズムの変質とみる考えがあるが、これは変質ではなく、侵略主義と結合した日本のナシヨナリズムが当然たどるべき運命であったと思われる。

日本のナシヨナリズムの運動が、辛亥革命時にはともかく孫文の側を支持したのに比べて、日本政府の動きをみてみると、当時の政府高官の意見書などをみても「アメリカが共和政の国である。隣の清国がもし共和政になると両方からは生まれた日本の前途はどうなる」と危惧の念を持つ人が多かったことがわかる。政府は早くから共和政の成立は望んでいず、何とかこれを防ぐ事を考えていた。清朝の政府はもう救う事ができない程腐敗しているから、何とか共和制でない政府を、という事で、複雑な動きを示している。国民革命は辛亥革命の時には成功しなかったが、清朝はとにかく倒れた。このあとでいろいろな政府ができ、一九二七年の国民革命迄は群雄割拠のような軍閥が互いに対立するようになった。この軍閥の対立をスターリンが評して、「それぞれの軍閥の背後に列強の帝國主義諸国がついているので、いわば中国を舞台

とした帝國主義戦争である」と言っているのは真理である。ところが日本のナショナリスト達は張作霖、吳佩孚などの相對立する軍閥の顧問等に参与して、全体を統一する運動はやっていない。それは日本の国策として、中国に強固な統一政府ができることを望まず、各軍閥にそれぞれ援助の手を差しのべていたからである。例えば、武器をそれぞれの軍閥に輸出したという事がある。高田商会とか大倉組等の文字通り「死の商人」であるブルジョワが単独ではなく太平組合というふざけた名前の組合をつくり、日本陸軍払下げの武器を密輸出し内戦をおおった。この武器売り込みの手先となったのも、大陸浪人といわれたナショナリスト達であった。

同様の事が、日本の領土になった朝鮮についてもいえることで、大正時代に堺利彦が出していた社会主義の宣伝誌「新社会」に朝鮮にいる日本人からの投書で「大陸浪人とか偉そうな事を言っているが、皆、総監府と結託して鉱山利権を取って、それを財閥に売るのが仕事である」と暴露しているものがあるが、中国にはいったナショナリスト達も、皆、そのような事をやっている。彼らは參謀本部から派遣された軍時探偵と密接に結びついているので、大正初め、辛亥革命が起るか起らないかの頃に、清国駐在の公使、伊集院参吉が外務大臣に送った手紙の中に「今、清国には百名余りの軍事探偵がいて、これがわが対支政策遂行の非常な障害となっている」と書いてい

る。この軍事探偵の淵源を尋ねてみると、川上操六、つまり日新戦争以来のものであり、各地でナショナリストと一緒に活躍を続けていた。婦人関係でいえば、河原操子が蒙古のカラチン王家の家庭教師、実は密偵として活躍した事は有名である。初期にアジアに活躍した女性是非常に少ないが、彼女達は皆、軍事探偵としてはいったのである。中国の統一にはまったく努力しなかつたナショナリスト達は、国民革命が成功して中国が一体となった時には、もはや関心も示さず参加もしていない。以上のようなことが中国について言えると思う。

これ以前にフィリピンの独立運動というものがあつた。それにも日本人は参加して、フィリピンの独立の志士が日本に亡命した事があるが、しかし当時の政府の方針としてフィリピンのスペインに対する反乱は援助するが、後のフィリピン領有はアメリカか日本がするのが一番よいのだと公式文書でいっている。決して本當にフィリピン人の為のフィリピンの解放は政府も軍部も言っていない。ナショナリストもやはりこの意を受けて、スペインに対する住民の反乱は支持するが、アメリカに対する反乱、独立運動からは、まったく手を引いている。この頃の日本の国力はアメリカに対抗するだけの力がなかつたからである。要する強國への追隨、弱少國への侵略であつた。

次に、大正時代に現われたのはインドの独立運動である。インドの独立運動で有名な人はビハリ・ボースであるが、彼は日本に亡命してきていた。彼はイギリスから迫害された人で、彼を、初期の中国革命に関心をもつたこともある頭山満という人がかくまつてやつたりした。しかし、政府はまだイギリスの意向を非常に怖れて、ビハリ・ボースをインドに送り返そうとした。その時、新宿の中村屋店主、相馬愛蔵が彼をかくまつたのは有名な話で、ビハリ・ボースは相馬の娘と結婚し、日本に住みつた。これは特殊な場合であるが、インドの場合は、政府がインド独立にのりださなかつたので、ナショナリスト達もいつのまにか、こういう個人の亡命者庇護以上の事はしなくなつていたと言える。

その他の右翼のナショナリスト達がタイに移民を送るとか、タイの富源を開発するとかいう努力をやっているが、民族運動を援助することは絶対になかつた。とりわけ、民族運動が統一されて、民族統一運動、独立運動になつた場合はそうである。このように皆それぞれ利権と結びついているのが、アジアに進出した日本のナショナリズムの大きな特徴だと思ふ。そういうナショナリズムがアジアの解放という場合、解放しなければならぬのは一番の植民地的抑圧下にいる朝鮮でなければならぬのに、朝鮮は解放されるべき客体ではない。これはアジア解放の主体であるといつて朝鮮をまったく無視している。

台湾にも戦前にいろいろな民族運動があったが、これを大別してみると、初め、大正時代に起ったのは、日本の板垣退助等と一緒に台湾の野心家が行った台湾同化会という運動であり、台湾人と日本人と同じ待遇にせよ、台湾の議会をつくれというような要求をかかげた。台湾同化会の運動は同化せよというだけで決して台湾のナショナリズムでもなんでもなく、ただ日本への隷属を推進する、民族を裏切る運動であつたと思う。こういうものとして始まった運動がだんだん進んできて、ロシア革命後、社会主義思想を持つものもでて、主として東京にいた台湾からの留学生が中心になって、その民族運動の中に社会主義的思想を持ち込み民族運動の大きな変化が起つてきた。この台湾同化会以後の民族運動には日本のナショナリストは全然関係していない。この頃、台湾の急進的な人達はむしろ中国の国民革命運動、つまり孫文の三民主義の影響を受けて、年号でも民國〇年という年号を使って中華民國に復帰するという考えであつた。それに対して台湾共産党に代表されるような民族主義者は、植民地支配国からの分離の自由という意味で台湾独立、台湾共和國の独立を唱えた。これは現在の台湾の一部独立運動者の主張と表面的には同じものである。この台湾独立論者達が、前にあげた中国復讐の運動に対してどういう意見を持っていたかという点、彼らは反動的な蔣介石政権のもとに復帰しようとしているという事で非

難攻撃し、帝国主義支配国からの分離の自由、民族自決の原則に基く台湾民族の独立をいつている。しかし、ともかくこれらの国民革命に参加して中国に復帰しようという運動にしろ、台湾独立運動にしろ、もはや日本のナショナリストとはまったく関係のない台湾だけの運動になっていて、日本でわずかに関り合いを持ったとすれば、共産党つまり左翼の勢力だけであつた。そういう意味でも、第一次大戦後は日本のナショナリズムというものは墮落して、完全に侵略主義と結びついたといつても過言ではない。こういう点が日本のナショナリズムとアジアを考える時に非常に大

事な事である。これが極端までいったのは今度の第二次大戦で、大アジア主義が新しい装いを持って現われてきた。これがフィリピンやインドネシアの独立運動を支持し、ある程度各国の民族運動を刺激したという事はできるが、こういう運動は初期の中國革命とは異なり、民族自身の中に相当大きな民族運動の主体が確立されているし、それぞれ共産主義者のグループが出て、非常に強固な民族運動がインドやインドネシアやフィリピンに起つてゆき、世界的にはコミンテルンと結びつくような運動となつた。世界的な社会主義運動の中で、共産主義者をはじめ民族運動をとりあげ、民族解放運動をコミンテルンと結びつけたことは特筆してもよいと思う。それ以前の

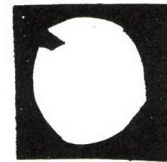
第二インターナショナルの時代は先進国の社会主義の運動で、社会主義が植民地や従属団

会主義の運動で、社会主義が植民地や従属団にまで拡がっていなかった。第三インターナショナルの時代はロシア革命後で、被抑圧民族の間に社会主義勢力が芽生えて、これがコミンテルンを中心にして社会革命の一潮流となつてきた。したがってアジアの植民地や被抑圧民族を指導する理念としては、ナショナリズムは消え去り、社会主義と結びついていったのである。朝鮮に例をとると、三一運動の結果、朝鮮の仮政府というものが上海にできたが、これは李承晩等が中心でアメリカやイギリス等の外国の勢力に頼って独立しようとしたものであり、武器を持って独立運動をやるのではなく他力本願でできたものであつた。その政府ですら大統領も民主共和制をとつてゐるのは注目できる。それまでの独立運動は李主朝の復興がスローガンだったのに対して、もう一つの社会主義者の運動は社会主義的な民族運動であつた。民族解放運動はロシア革命では明らか二つの潮流にわかれてしまふ、日本のナショナリストが民族解放運動に関与する余地が全然なくなつてしまつた。そこで彼らの墮落が一段とひどくなり、常に侵略主義と結びつくようになった。その上にさらに、転向した無節操な共産主義者が大東亜共栄圏という事に参加した事は間違いない事であると思う。これが日本のナショナリズムの末路ではなかつたかと思ふ。

日本の朝鮮支配と吉野作造

—一つの仮説として—

岡部 牧夫



本稿は一九七〇年一月二六日の本会月例会での報告に手を加えたものである。従って当時月例会が共同で読み進めていた朴春日『近代日本文学における朝鮮像』第二章の5、吉野作造、柳宗悦、矢内原忠雄の朝鮮観の意義と限界とを扱った部分が本稿の直接の動機となっているが、報告の意図はむしろ現在の日本近代史研究の中で異った二つの評価を与えられている吉野作造像について、私なりの仮説を提出するところであった。吉野の思想の歴史的意義について、私はまだ自信を持って論ずるには至っていない。この仮説は今後もっと厳密に吟味・検証してゆかなければならないし、本稿自身、仮説というにもあまりに粗雑である。

さて、それでは吉野作造の朝鮮観をとりあげようとするのはなぜか。朴春日氏の文脈から離れて私の問題関心を整理しておくならば、それはほぼ次のような点に尽きよう。

日本近代史はそのまま周辺アジア諸国に対する侵略と抑圧の歴史である。日本帝国主義の成立をいつとするかは研究者間の論争点の一つであるが、帝国主義の経済的指標であれば、日露戦争後から第一次大戦の時期にかけてと見なければならぬ。しかし帝国主義は単なる経済体制ではなく、また単に一國の現象にとどまるものでもない。日本帝国主義の特殊性、具体性をどう把握するかでその成立の時期も違ってくるが、近年の研究方向は、一九〇〇年の義和団事件への干渉を契機に日本帝国主義が早熟的に成立したとする点で共通点を見出しつつある。つまり日本帝国主義は国内の独占資本の成立を待たず、英米帝国主義に対する著しい従属と絶対主義権力の強大な軍勢力とでその経済的早熟性を補いつつ、他國への帝国主義的抑圧者として登場したのである。

日本帝国主義の成立に際しての右のような状況は、ほぼそのまま一貫してその後の日本

帝国主義の特質であった。経済的側面が帝国主義の全局面をリードし、軍勢力が後景に退いた時期は極めて短かった。他國への進出は常に絶対主義的な領土拡張衝動に彩られていた。そしてこの衝動は、日本帝国主義が明治維新以来の膨脹政策を受け継いだものでもあった。日本近代史にとっては、帝国主義成立に先立って他國への侵略と抑圧とがあったばかりでなく、その契機がその後の帝国主義的他國侵略のありかたをも規定したのである。

こうして私たちは日本近代史を貫く他國侵略・抑圧の事実を歴史的必然として捉える。それと同時に、このような植民地主義がなぜ一貫して絶えることなく存続できたのかを考える。その時、おのおのの時代の植民地主義政策やその思想に対して、これに反対する主張があったか、これを吟味する作業が必要になる。もしあったとしてもそれが有効な反対勢力になり得なかったことは歴史の示すとおりであるが、それならばなぜ有効な反対勢力になり得なかったのかという点を明らかにすることは、帝国主義の支配体制を等しく受けている私たちにとって、極めて緊要の実践的課題である。

日本帝国主義ないしその植民地主義に対する一定の批判は、日本近代のどの時期にも存在し、今も存在する。それがいづれも「一定の」批判であった点がまさに問題なのだが、その中でもいわゆる大正デモクラシーの時期にあらわれた幾つかの思想や運動は、この

「一定」の内容が他とくらべて相対的に大きいという点で今日入念に検討しておく必要がある。吉野作造は大正デモクラシー思想の論壇的代表者であり、戦前の日本帝国主義が最も進歩的な外見をとった時期にあらわれた民主主義者である。(多くの限定のついた民主主義者ではあるが)。彼の思想を問題にすることは、大正デモクラシーが帝国主義およびその植民地主義にどのように抵抗したかを確認することである。そして、それにもかかわらずこの抵抗が有効なものになり得なかった理由を明らかにし、帝国主義との闘いの途上にある今日の人民が「歴史に学ぶ」際の一つの手がかりとするためである。

帝国主義・植民地主義に対する抵抗とその効果の大小という右のような問題意識からすれば、吉野作造の思想についての評価は既に定まっていたと言ってよい。有効な抵抗はもとより反帝国主義的な主張さえなく、論者によつては民主主義は帝国主義であるとまで極言する(宮本又次氏)。そうでなくても、吉野の思想には民族的視点はあが階級的視点は欠け、帝国主義の本質を見失っているという評価(田中惣五郎氏)や「吉野はかくて日本帝国主義を擁護し、中国民族と正面から敵対した」(小林幸男氏)という見解が支配的であった。

反対に吉野の思想について肯定的な意見は松尾尊充氏の諸論稿に見られる。松尾氏は一九一九年の三・一運動についての吉野の所論

を積極的に評価し、「朝鮮の独立を支持し、その紙面を朝鮮人学生に解放してその所信をのべさせたのは、吉野の門下によって結成された新人会の機関誌『デモクラシー』だけであつた。」(吉野は一九一九年の段階において、単なる統治政策の改善でなく、朝鮮の独立を原則的には是認し、民族開放運動一般ではなく、自国の帝国主義に対する民族解放闘争に共感するという、きわめて正当な、そして当時の日本言論界においては比類のない高度な国際関係理念に到達しており、かつこの理念を、一身の危険をかえりみず公言したのである。権力の抑圧のもと、プロレタリア国際主義を奉ずる社会主義者の、誰一人この独立運動支持の態度を表明しなかった、あるいは表明しえなかつたとき、吉野こそ日本人民の良心を代表するものであつたといわねばならない。」(松尾尊充編・吉野作造『中国・朝鮮論』解説)と情熱をこめて吉野の思想的意義を高揚する。同氏の吉野作造再評価の努力は既に『大正デモクラシーの研究』、『吉野作造と朝鮮』、『民本主義の潮流』などの論述を生み、それらを受け継いだ中国・朝鮮論の「解説」は、日本の植民地主義に対する吉野の思想についての氏の見解を最も新しい形で私たちに示したものと云えよう。しかしこれらの文章が従来吉野観に対する熱心な批判のあまり多少誇張のきらいがないでもないらしいことは、「朝鮮の即時解放」というふうなことはもちろんいけませんし、それか

ら五・四運動のさいでも二一カ条を即時廃棄するということもいけません。しかし吉野の考え方をつきつめていえばです、ね、そういうところまでいくという方向がはっきり見えていと思う。」(吉野の考え方を発展させていけば、帝国主義を否定するところまでいたるといふことです。)(『シンポジウム日本歴史』20)という氏の発言の、一步後退したニュアンスからうかがえるが、吉野の思想を「反帝国主義とはいえないかもしれないけれども、非帝国主義という評価くらいはできるのではないか」とする点は一貫して変らない。従来吉野像は彼の思想を陰証する手段として政治的な歪曲の多い『吉野作造博士民主主義論集』に依拠すること多く、従つてその論調が最も進歩的であつた時期の吉野像を抱えることができなかつたことからおおむね低い評価を与えることになつたといふ松尾氏の見解は充分うなずけることである。幸い同氏による『中国・朝鮮論』の編纂は、帝国主義・植民地主義に対する吉野の思想を検証する上での資料的前提を強化するものである。以下同書によりながら、吉野がはたして「朝鮮の独立を是認」し「非帝国主義」の立場を明確にしたかどうかを、三・一運動に対する諸論説を中心に私なりに検討してゆきたい。

2

吉野は既に一九一六年「満韓を視察して」という一文(『中央公論』同年六月号)を草

し、アジア諸國に対するそれまでの見かたを一変させていた。これは同年三月末から四月末にかけて朝鮮と中国東北の各一部を旅行したのちただちに執筆したものであった。旅行の目的は「日本の統治に対する朝鮮人の批評を聞くにあった。」そして朝鮮に行なわれている日本の専制支配、いわゆる武断政治の実情を見聞し、日本の官僚・軍人による威圧的政策と対朝鮮人差別とを批判、「およそ植民的経営に成功するものは、一視同仁殆んど國籍の差別を忘れて懸るの心掛がなければならぬ。我に於て誰彼の差別を忘れてかれば、相手方も亦我の外人たることを忘れてかかる。」と説いた。日本帝國主義の朝鮮支配に対して、決して根本的なものではないにしろこのように一定の批判を試みていた吉野は、一九一九年三月に三・一運動の起るやこれに対して日本人の反省を求めた（一九一九年三月二日黎明會第三回講演會開會の辭「まず自己を反省せよ」および「対外的良心の發揮」《中央公論》同年四月号）。どういう点で反省すべきか、「対外的良心の發揮」によればそれは次の二点に示される。第一に、三・一運動の正しい解決の前提としては、日本が朝鮮の暴動を頭から非難するのではなく、日本の統治を朝鮮人が事実においてどう見ていたかを検討する態度がなくてはならないこと、第二に、三・一運動を一部第三者、特に在朝鮮外國人宣教師の扇動としてではなく、朝鮮人民の自発的な意志として考えなければならぬ

ことである。三・一運動に対する日本の多くの論者が右の点を問題にせず、朝鮮人の暴動をひたすら主観的に非難してきたことを吉野は批判したのである。反省すべき第一の点を吉野自身の言葉で聞いてみよう。

第一は、日本の朝鮮統治が鮮民の心理に事実上いかなる影響を与えたかを究めずしては、問題の解決は出来ないと言ふ点である。日本の統治が善かったか、悪かったか、又これに対して朝鮮人がいかなる考を有すべき筈であるかと云うような事は、暫く問題外に置いていい。ただこれを朝鮮人がどう見たかを検するのが必要である。鮮民がかく考える事に道理ありや否やを姑く第二に置いて、事実鮮民が日本の統治をどう考へて居るかを、鮮民の立場から考へることが必要だと云うのである。不幸にして形式政治家はこの觀察を怠るを常とする。彼等は云う、これだけの世話を（して）やれば鮮民に文句は無い筈だと。無い筈だとの妄断は、一転して彼等は日本の統治を謳歌して居ると云う迷信となる。（中略）我國の為政家並びに國民の多数は、暴動の事実に遭遇してなお容易に覚めようとしなない。いかに親切を尽しても、繼母の親切は子供を懐かしめない。小糠三合あれば聲に行かないと云うのが、人間の意地である。この有りふれた真理に通曉せずしては、容易に多数の人を操縦する事は出来ない。分かった人、捌けた人として下男や女中の尊敬を受

くる大家の旦那などと云うものは、畢竟かかる平凡な人類の心理に通じた人である。植民政策成功の秘訣は又この外に出ない。右のような論を踏まえて、吉野は同年六月五日の黎明會第六回講演會の演壇に立ち、「朝鮮統治の改革に関する最少限度の要求」を明らかにした。三・一運動を契機とする従来の支配方法への反省から一歩進み、日本の朝鮮支配がどのようなものであるべきかについて吉野の意見が公けにされている。

吉野によれば改革を要する第一の点は「朝鮮人に対する差別的待遇の撤廃」である。吉野は差別的待遇の内容をさらに細かく吟味し、教育の機会均等、官吏任用上の機会均等、民間での差別の克服の三点の実現を訴える。改革の第二点は「武人政治の撤廃」である。「朝鮮を統治する所の者が、軍人でなければならぬ」という理窟は無い。さればとて軍人ではないけないという理窟も無いが、とにかく統治の能力の有る者ならば、軍人だろうが文官だろうが、いづれでも構わないが、ただ現制の如く軍人でなければならぬという理窟は全く無いと思う。」として、朝鮮總督武官制の改革、總督府行政機構内の軍人の権力、なにかんぞ憲兵行政の弊害の是正を求めている。第三の要求は同化政策の廃止である。「朝鮮人に向つて、その長い歴史を經て出来上つたところの、いっさいの伝統を忘れて、そうして日本人になれという事の無理なことはいふまでもありません。これは不可能の要求であ

ると思う。(中略)もしも日本と朝鮮とが、将来に於て根本的に融和するの途が有りとなれば、それは今の同化政策を棄てた時でなければならぬ。今の同化政策のままではどうしても融和しないと、私は確信する者であります。」と述べて「同化政策」そのものに対して原理的疑問を投げかけている。最後に主張するのは「言論の自由を与えよ」という事である。日本の朝鮮支配の具体的諸政策については、朝鮮人ばかりでなく在朝鮮日本人間にも不平があり、「一つでも二つでも、そういう不平が有るならば、そういう不平の有るという事を、朝鮮統治の責任の衝に当る者は、知って居なければならぬ。又吾々国民もそれを知りたい。」従って「私は、朝鮮にも言論の自由を与えて貰いたいと要求するのであります。が、実は内地に於ても、言論の自由は、相当の迫害を受けて居るのでありますから、内地以上の言論の自由を、朝鮮に於て与えよとは言わない。内地でも相当の圧迫を蒙って居るのであるから、その程度の圧迫は朝鮮の諸君に甘んじて貰うとして、とにかく内地と同様の言論の自由を、朝鮮に与えてくれるしかるべき事だと思っております。」

以上吉野の要求する最少限度の改革を個別に検討してみるならば、それらのあいだには少なからず論理的な混乱が認められる。第一に吉野の主張する差別的の徹底は、あらゆる場面にわたっての差別政策の貫徹と民間の差別意識の助長を前提にしてはじめて成立するという帝國主義の植民地支配の本質的なありかたを根底から批判するには至らず、たかだか表面上の差別的緩和を要求するにとどまるという弱さを持っている。また、第二の「武人政治の撤廃」にも同様な限界が認められる。もともと日本の植民地支配を特色づける点はその著しい軍事支配機構にある。とは云え今日の時点から見れば、台湾は一九一九年十月(田健次郎)、関東州は一九一九年四月(林権助)、樺太庁は既に一九〇八年四月(床次竹次郎)以来、それぞれ一時的に文官の行政長官が実現している。ひとり朝鮮総督だけが四十年間一貫して武官を迎えているのは、朝鮮の民族運動・独立運動が、日本の他の植民地のそれと比較してはるかに強くはるかに持続し、日本帝國主義がそれをもっとも恐れたために他ならない。この事実を吉野が知らなかったことは必ずしも彼の責任ではないが、逆に言うならば三・一運動当時は樺太を除いて日本の植民地がすべて武官の支配を受けていたのであり、その中で当の「朝鮮を統治する所の者が、軍人でなければならぬ」という理窟は無い」とするのは、言葉の上での一般論としてはなりたち得るにしても、日本帝國主義の植民地支配を見誤り、これまた根底的な批判にはなり得ていない。その証拠に、吉野は朝鮮で武官総督制の行なわれている理由を、総督府行政機構の中で文官より武官の権力が強く、特に憲兵行政が浸透していることに求めている。

第三点をしばらくおいて、第四の言論の自由の要求については、「内地以上の」自由を主張するものでない点は第一の差別の問題に含められる。ただ、言論の自由が国民にとってはおもとより民意の確認の点で為政者にとっても必要であるとする点は民本主義者吉野作造の真骨頂を示すものとして積極的に評価できよう。

四点の改革要求の中でもっとも生産的なのは策三の同化政策批判である。日本人と朝鮮人との歴史的に異なる民族として発展してきたのであるから現実的に同化の不可能なことを主張、一方で同化を唱えつつ他方で差別するという「従来の同化政策」を棄てよと述べて、のちの吉野の発展につながってゆくのである。しかしこの要求も、吉野の思想的発展の踏石として考えた時はじめて意義があるのであって、現実の改革要求としては他の項目と同様にさしたる高い評価を与えることはできない。

3

ここまでの段階で注意すべき吉野の論点は日本の反省と、それにもとづく彼の改革要求の意味であった。吉野の言う反省は発表雑誌の性格上、一方では朝鮮人の民族的特殊性を無視しつつ一方では朝鮮人を差別してきた日本の植民地支配の事実について、支配者にはその政策の誤りを、一般国民には当局に対する無批判を、ともに道徳的・人道的立場から

反省せよと主張しているように見える。そこに吉野の思想の限界を見るのがこれまでの多くの論者の指摘でもあった。しかしそのような読みとりかたは誤りであるように思える。

吉野の所論が近代政治学者としての彼のものの考えかたに由来することは言うまでもない。政治学者としての彼は、三・一運動に際してもこれをあくまで一個の客観的な政治的事実として冷静に見る態度を堅持した。(当時の日本にあって、この態度を持することが既に民明的でもあれば進歩的でもあったのは確かである。)吉野は政治学的な客観性をもって三・一運動を見、これの因果関係を把握しようとした。この運動の原因は何か、それを解明し、そのような事件を起さないような政策を立てることが近代政治学の一つの任務である。事件の因果関係を把握するためには当然客観的な観察が必要であり、その手続きは官僚的専制政治に比較して相対的に進歩的・人道的な外見をとる。その結果、吉野は事件の原因を一方的に朝鮮人の「無知」「忘恩」あるいは第三者の扇動に帰することへの批判に到達する。それは日本の統治技術の拙劣さの中にも原因の一端があることを認める立場である。「日本の統治が善かったか悪かったか、又これに対して朝鮮人がいかなる考えを有つべきかであるか」という価値判断を去り、「ただこれを朝鮮人がどう観たか」という客観的事実の究明を主張する点にこれはよくあらわれている。三・一運動の原因を正し

く把握するためには「鮮民が日本の統治をどう考えているかを、鮮民の立場から考えることが必要」なのである。この文脈から言えば、吉野が人道的な観点から朝鮮人の立場に共感をよせたわけではないことがはっきりする。

探偵が殺人犯の目星をつけるに当って、自分が犯人ならどうするかと「犯人の立場から」推理をめぐらすのと似ている。だからと言って探偵が犯人に共感したわけではない。吉野も朝鮮人への共感を表明してはいないのである。「むろん彼等が乱暴をしたのであるから、罵っても宜い。けれどもただ罵るばかりで、吾々の方で反省する声は聞かぬのであります。」

この喧嘩両成敗的論法も、彼の言う反省が右のような意図から出たものである限り当然の主張であろう。反省の結果「乱暴をした」とさえ無理のない状況であったかもしれないという方向は、吉野にあってははじめから閉ざされていた。

そしてその程度の反省ならば、日本の支配層も既にその必要を感じていた。一部の保守主義者を除いて、当時ようやく「憲政の常道」としての政党内閣を制度的に確立していた日本独占ブルジョワジーは、朝鮮に対する武断政治の弊害に気づき、外見的にはそれを改める方向に向かっていた。より合理的な植民地支配の制度化の一例は、前述のように一九一九年四月関東州、同一〇月台湾の文官長官任命にも見られるのである。朝鮮でも文官総督こそ実現しなかったが、武官に限る制度は廃さ

れ、憲兵警察は普通警察に改編され、官吏・教員の帯剣も廃止された。また朝鮮語新聞の発行が許され、政治機構中に朝鮮人の意志を反映する道も開かれた。もちろんこれらによって日本の朝鮮支配が進歩的になったわけではなく、外見的穏和化とは逆に改革が専制の実質的強化になったものもあるし、現実にはさしたる機能を持たず粉飾にすぎないものもあった。しかし制度的に見る限り、確かに改革には違いなかった。そしてこれらの諸改革は前に述べた吉野の最少限度の要求と大綱においてほぼ同じものであった。従って彼の改革要求は、現内閣および総督齋藤実のいわゆる文化政治のもとで形式的にせよ実行可能なものだったのであり、日本の独占ブルジョワジーの比較的開明的な部分の意図と奇妙に一致していたのである。従ってこれをもって吉野の思想が日本帝国主義の植民地政策に対する反対投票として機能したとは断じ難い。

4

吉野の論調は、三・一運動後やや深化を見せる。特に「いわゆる呂運亨事件について」(《中央公論》一九二〇年一月号)、「朝鮮青年会問題―朝鮮統治政策の覚醒を促す」(《新人》一九二〇年二月三月号)および「朝鮮統治策に関して丸山君に答う」(《新人》一九二〇年四月号)の三文で著しい。その要点は吉野が「朝鮮民族の独立志向は道徳的に悪ではない」とする主張を打ち出したと

ころにある。

日本政府は一九一九年一月在上海朝鮮獨立政府外務次長呂運亨他三名を懐柔のため日本に招き、その独立要求を発表する機会を与えた。当局の好遇は軟弱にすぎるとの非難が起こり、政府は苦境に陥った。吉野はこの非難を弁駁し、政府を弁護した。まず「いわゆる呂運亨事件について」では次のような論理を展開する。「なるほど朝鮮独立の計画は、日本の國法に対する反逆」であるし、その「主謀者の一人を帝都に招致して款待優遇する」のは國法を無視した行為に違いないが、國法は「絶対的の約束」ではなく、「國法の權威よりも、國家そのものは遙かに重い。」

「朝鮮問題がかくの如く紛糾」している時「紛糾の原因たる問題の有刀な一人を、礼を以て招致し、これと將來の平和幸福を相談するのが何で悪いか。」これを「國法破壊、朝憲紊乱の形式論で行くのは、あまりに政治家としての聰明と臨機応変とを無視するものではあるまいか。」さらに「大和民族の一人がかりに同じ事を企てたというなら、これはとうてい一步も仮借することは出来ない。しかしながら彼は朝鮮人である。形式を離れ、朝鮮はいかにして日本に合併されしかの実質を考えて見よ。更に今日我々國民の耳目に最も明白になった、過去十年間の朝鮮統治上の重大なる失策を反省して見よ。許すべからざる事ではあるけれども、朝鮮人の独立を企つるに、そこに恕すべき何物をも見出すことが出来ないだろうか」と。

また彼は「朝鮮青年会問題」で再びこれにふれ、「朝鮮人が日本という國に対して我々内地人と同じような忠実の心を有って貰いたいという事は、我々の熱心に希望するところではあるけれども、急にこれをもとと強いる訳にいかないは勿論、持たないからとてこれを不都合呼ばわりするのは甚だ酷である。少くとも、かくの如き魂を有たなければならぬものとして彼等を取扱うというが如きは、断じて穩当でない。内地人が叛逆を企らむというのなら、それこそ真に許すべからざる暴漢に相違無いが、純粹の大和民族でない朝鮮人が、しかも、あのような状態で併合され又あのような状態で統治された朝鮮人が、日本國に対して内地人と同じような考えを有ち得ないのは、我々としては遺憾の事ではあるが、自然の成行としては亦己むを得ないと思わる。」従って朝鮮人が「日本の國法に反抗する」ということは、純粹の道德的立場から観てあながち不逞の暴行ということは出来ない。「朝鮮人の独立運動は「法律的には排斥すべきことであって、しかも道德的には大いにこれを諒とすべき理由があるのである。したがってこれに不逞兇暴というような道德上の汚名を冠するのは、我々としても良心が許さない。」と主張する。

つまり吉野は、民族の独立志向は一國の法律よりも高次の理念であり、朝鮮民族また日本民族と相違する以上、日本國法に背反しても、法による制裁はともかく、道德的に不呈

と称するには当たらないということをくり返し述べているのである。「内地人の叛逆なら同一の罪を法律的にも道德的にもこれを排斥するに矛盾を感じない」、「内地人なら一步も仮借することのできない大罪」と何度も強調するところに右の点はよくあらわれている。松尾氏は吉野のこの主張をもって原則としては彼を朝鮮獨立論者とし、あるいは少なくとも「つきつめていえば、そういうところまで行く」思想家であるとして高く評価している。しかし私としてはこれらの吉野の所論から、そのような吉野觀をひき出すことは無理でもあれば誤りでもあると思う。なぜかと言えば、第一に吉野が具体的に日本帝國主義支配下の朝鮮の獨立を主張したと言うのは彼の論説の行間の読みすぎである。「朝鮮統治策に關して丸山君に答う」で吉野は言う。「丸山君は、獨立陰謀を僕が道德的に是認するものと見て居られるようだが、これがそもそも誤り」で、「僕の趣意は、朝鮮民族獨立運動の根本的動機には道德的なものが有ると云う点である」と。これがたして彈圧を感つての言い逃れであろうか。私にはそうはとれない。むしろここでも吉野の真意は近代政治學的客觀性の強調にあり、それにもとづく因果分析が示されるのみで、右に自身述べているとおり、吉野は、獨立運動を是認しているのではない。吉野の「趣意」は、「一般に獨立運動の原因には道德的なものがあるのだから、

出稼ぎ女の唄

正月忙しいは おなごばっかり

奥さん暇くれよ わしや娘に会いたい

「正月アお客でこんなにせわしい

十のつくえは二間にぎっしり

お前が娘に会う暇あるか！」

— お碗のそばへ涙が落ちた

二月忙しいは おなごばっかり

奥さん暇くれよ わしや娘に会いたい

「二月ア糸引き こんなに忙しい

十の糸車を二間にならべ

お前が娘に会う暇あるか！」

— 糸車の板へ涙が落ちた

三月忙しいは おなごばっかり

奥さん暇くれよ わしや娘に会いたい

「三月ア機織りでこんなに忙しい

十の機（はた）を二間にならべ

お前が娘に会う暇あるか！」

— 機の上に涙が落ちた

四月忙しいは おなごばっかり

奥さん暇くれよ わしや娘に会いたい

「四月ア田植でこんなに忙しい

苗をそろえてずらりと植える

お前が娘に会う暇あるか！」

それを忘れて主観的な非難をするだけでは問題の有効な解決はできない」というところにある。そのような文脈からする発言がいくら熱心にくり返されたところで、吉野自身が朝鮮民族の独立運動に共感を示したという証拠にはならないのである。

第二に、民族の独立を国法より高次の理念に位置づけている吉野も、それを強調すればするほど、人民が自国の政治体制を選択する権利を逆に否定する結果にならざるを得ない。もし日本に現行支配体制を打倒する運動が起きたならば吉野はただちに「仮借すること」なくそれと闘うだろう。これは朝鮮の独立を是認するのあまり比較すべき例え話として修辭的に記したことで決して決していない。事実吉野の共産主義に対する態度はそれを裏書きしている。そしてこの点もまた、吉野の帝国主義批判を本質的に弱めているのである。

さらに第三点として、朝鮮の亡命政権の中心人物を招いてこれを懐柔しようとした日本政府のやりかたこそ、吉野の主張する「反省」とはおよそかけ離れた行為であるが、政府非難の声に反論するのあまり、政府の帝国主義政策の一端をかえって弁護するに至ったことがあげられる。

このように、吉野の思想は朝鮮観という一局面に限って見ても、日本帝国主義の植民地政策に一貫して反対しているとは言えず、松尾氏のように「反帝国主義とはいえないかもしれないけれども、非帝国主義という評価く

らいはできるのではないか」とするには多くの難点があつて、同氏の見解はにわか賛成しがたい。反面小林氏が「帝国主義を擁護した」というほどの積極的な帝国主義者ではもちろんない。吉野の立場に立つて言うならば、「帝国主義を擁護する結果になつた」とも言うべきであろうか。くり返して言えば吉野の思想は、天皇制官僚支配機構に依存しなれば存立できなかったとは言え、逆にその支えによって当時の日本の支配階級の中で相対的には最も進歩的な外見をとった開明的独占ブルジョワジーの許容できるものであり、しかも彼らもその精髓を制度化することによって階級的利益を得ることができ、その限りでの進歩的な思想であつた。ある部分では吉野はブルジョワジーの改革方向と一致し、ある部分ではそれより一段低いところにとどまっていた。

しかし吉野が絶対主義天皇制のもつとも典型的な支配形態である藩閥専制体制の帝国主義・植民地主義に対して大いに闘つたという点は認めなければならぬ。この点を無視することは「私としても良心が許さない。」

■ 紹介

雑誌「日中」が、アジア諸民族との真の交友をめざして創刊された。八月創刊号では「新版小学校教科書と中国・朝鮮」を、九月号では「南京大虐殺と日本人」を特集。発行は日中書林・価一五〇円。

— 田の草の上へ涙が落ちた

五月忙しいは おなごばっかり
奥さん暇くれよ わしや娘に会いたい

「五月ア麦刈りでこんな忙しい
十ちやうの鎌を二間にならべ

お前が娘に会う暇あるか！」

— 麦草の上へ涙が落ちた

六月忙しいは おなごばっかり
奥さん暇くれよ わしや娘に会いたい

「六月ア草取りでこんな忙しい
十ちやうの鋤をずらりとならべ

お前が娘に会う暇あるか！」

— 豆の葉の上へ涙が落ちた

七月忙しいは おなごばっかり
奥さん暇くれよ わしや娘に会いたい

「七月ア花摘みでこんなに忙しい
十の籠をずらりとならべ

お前が娘に会う暇あるか！」

— 棉の花の上へ涙が落ちた

八月忙しいは おなごばっかり
奥さん暇くれよ わしや娘に会いたい

「八月アもみたたきでこんなに忙しい
十本の棒がどんどん響く

お前が娘に会う暇あるか！」

— もみつむ筏の上へ涙が落ちた



朝鮮の婦人の髪飾り
〔寧神服飾図鑑より〕

わたしが日本人であること

梅谷 朗子

二年と四ヶ月のあいだ、アメリカの主としてニューヨークの下町で生活しながら、わたしの心をしめていた間は、わたしが日本人であるということとは一体どういうことなのだろう、ということだった。この間はわたしが日本にいるあいだは思いも浮ばなかった間で、アメリカへ渡り、自分とは異なる人たちの中で生活していくあいだに、たびたび日本人であることを実感として思い知らされた結果として生れてきたのである。その日本人である

実感がどういふときに感じられ、それがどういふことであるかを、ここに書いてみたいと思う。

わたしが日本を発ったのは一九六七年五月のことだが、それはただ日本を脱出するという程のもので、はっきりした目的意識があったわけではない。なぜアメリカへ行ったのかという問をその後たびたび聞かれたが、そのたびに外側からチャンスがあったから（姉が滞米）と答えることにしてきた。ただわたしとしては、それまで職業としていた週刊誌の

取材記者という水商売のいいかげんさに嫌気がさし、精神的な疲労を感じていたことと、漠然と日本という国の外へ出てみたかったというのが本音であった。

わたしが最初にアメリカですごした夏は、デトロイド、ニューヨークで黒人暴動が激しく起きた年であるが、これらの黒人暴動を新聞のニュースとして横目でながめながら、ひたすらにわたしは日本が恋しかった。それは普通、人がホーム・シックと呼ぶもので、異邦人としてくらす日常生活が緊張をしいられればしいられる程、理屈抜きにはるかなる故郷がなつかしく思われるのである。たとえわたしは都会育ちであるにもかかわらず不思議なことに、青々とした水田と蛙の鳴声が故郷の風物として心に浮ぶのであった。そのほか人とぶつかりながら歩いた新宿の雑沓、よく行った本屋、その眼鏡をかけたてっぷりした親父、待ち合せて使った喫茶店とそとに流れていたメロディなど。これらに対する郷愁は、意味づけをする以前の生のセンチメ

十月忙しいは おなごばっかり
奥さん暇くれよ わしゃ娘に会いたい
「娘がわし思や わしゃ娘を思う
娘のことを思うと体が倒れる」
「十月ア妻播きでこんな忙しい
十ちよりのから勤ずらりとならべ
お前が娘に会う暇あるか！」

妻のたねの上へ涙が落ちた

十一月忙しいは おなごばっかり
奥さん暇くれよ わしゃ娘に会いたい
しごと片付け娘に会いに帰りや
娘はわずらうて死んでいた

両手で床から抱きあげたまんま
悲しさのあまりに大声あげて泣いた

十二月忙しいは おなごばっかり
奥さん暇くれよ わしゃ娘に会いたい
まえに帰った時や娘がわしを呼び
こんど帰って見りやわしが娘を呼ぶ
この娘を墓場へ送っていつて
悲しさのあまりに大声あげて泣いた

(服部靖・安永寿延 訳)

■ 解説
安永寿延著『日本の民謡』(創元社・一
九五六年)より再録。中国の辺境に伝え
られた民謡の傑作で、形象化もみごとだ
が、断わられても重ねて頼む母親の姿に
は、中国民衆の粘り強さが出ている。

ントとして、確実に、力づくわたしにせま
ってきた。

こうした感情は、ナシヨナリズムというよ
りはパトリオティズムと呼ぶべきものである。
パトリオティズムとは「自分の郷土、もしくは
はその所属する原始的集団への愛情であり：
：あらゆる種類の人間のうちにひろく知られ
ている感情」(Koeudourie, Nationalism P. 74
橋川文三著、ナシヨナリズムから転用)それ
は自然発生的に、すべての人がもつ感情であ
る。わたしがここで言っているのは、人が生
きてきた空間に対する愛着のことであり、政
治共同体(国家)への忠誠などというもので
はもちろぬない。

以下少し長くなるが、橋川文三氏がミヘル
スの「パトリオティズム」から引用している
印象的な一節が、この感情をうまく描いてい
るので引いてみる。

「谷川のとある屈曲、庭の裏手の灰色に古
びた木戸、ストーブで焙られているリンゴの
かおり、温かい両親の家にただよっていたコ
ーヒーや料理の匂い、町から郊外へ、郊外か
ら町へと野原を通っていた小路、その小路を
歩いた思い出、童歌のメロディ、子供のころ
のある夕暮のざわめき、……それらが祖国で
ある。人間にとって祖国とは国家のことでは
なく、幼年時代のふとした折のなつかしい記
憶、希望にみちて未来を思いえがいていたこ
ろの思い出のことである」
こうして、わたしがはるかなる故郷に思い

をさせているとき、日本にいるとき友人であ
った一人の朝鮮の青年の言葉が強烈によみが
えってきた。彼は日本で生れた朝鮮人である
が、

「朝鮮の歌を聞いても、目に浮ぶのは日本
の田畑だからなア」
とふつと云ったことがあった。この言葉の哀
しみが、自分が日本から出て、故郷を心には
ぐくんでいるとき、はじめてよく想像された。
心にはぐくむ故郷を直接には持ちえぬ引裂か
れた存在として。そして彼が痛みをもってな
つかしく思い出された。彼はまた自分が朝鮮
人であることを、いつもわたしが奇異に感じ
る程強く主張していたが、なぜ彼がそうせざ
るをえなかつたかということも、そのとき良
く理解された。彼のまだ見たことのない故郷
は遠く手のとどかない状況にあり、彼が日本
では疎外された存在であるのだから、それは
まさに当然である。

わたしがアメリカで日本人だと実感した第
二は、人種的な意味においてである。わたし
はニューヨークでコロンビア大学の東亞圖書
館日本語科で働いていたが、毎朝ダウン・タ
ウンのアパートからアップ・タウンにあるコ
ロンビア大学まで地下鉄でかよっていた。ニ
ューヨークは歴史的にヨーロッパからの移民
が最初に行き着いた所であり、実にいろいろ
な人種が入り混っている。朝夕のラッシュユ
の地下鉄は、とくに、黒人、ブルトリコ人、
ニダヤ系、アイルランド系など人種のサンブ

ルで、その中でわたしは日本人（東洋系）であるという自己認識を持たざるを得なかったのである。

人種的意味で日本人であるという自覚は、毎朝夕地下鉄の窓に写る自分の顔をながめつづけるところから生れてきた。そこに写っていたのは、黒いまっすぐな髪、いくらか透明ではない肌、黒い目ののっぺりとした東洋人の顔であった。色彩のない東洋人の顔。そのとき、美しくないという自己嫌悪に近い思いがあったのをわたしは告白しなくてはならない。多分それは黒人がかかって黒い肌、ちぢれた髪毛を恥じたのと類似の感情で、周りの人たちのつくられた美の基準を反映してのことであろう。周囲の視線の中で、わたしはあまり美しくない東洋人の一人であった。

アメリカで識った日本人という自己認識は、このような人種的に差別される東洋人（黄色人種）としてであった。そしてこの認識がわたしには重苦しく感じられた。いまわたしはここで目にも見える外観上の容姿を問題にしているのだが、人種差別というものは、一義的に目にも見える人種の特徴をその対象としているのだ。人は、意識的であろうとなかろうと、その視線で人を疎外している。たとえば、わたしが大変に仲のよいアメリカの女の子と話しているとき、彼女がすばらしい人間で東洋人だからといって差別を意識していないときでも、東洋人に対する差別感が空中にただよっているのを、わたしの方では感じ、それが

わたしには重苦しく思われた。

このようなアメリカ人（西欧人）の東洋人蔑視（意識的でないにしろ）の中にいると、他のアジア系の人たち、朝鮮人、中国人には非常な同胞意識をもつものである。わたしが働いていた東亜図書館には中国語科と朝鮮語科とがあり、そこで働いていた中国人や朝鮮の人たちには言葉以前の親密感をいだいた。わたしたちはお互いにその国の言葉を教えあったり、おぼつかない英語でコミュニケーションしようと努力したものである。

最近アメリカの友人（日系人）からきた手紙によると、四月二四日のワシントンの反戦デモには、アジア系米国人の組織が初めて参加し、三百人ほどが中国語、日本語、英語ごちゃ混ぜのスローガンをかかげて行進したそうである。このデモに参加したその友人は、ほかのアジア人と共に行進することに非常な感銘をうけたと書いてきた。

しかし、このようなアジア系人の連帯意識とはべつに、一般の日系米人のあいだには、東洋人であっても日本人は特別であるという意識が、あい変わらず根強くあることもまた事実である。戦前にアメリカへ渡った日系一世のあいだにはいわゆる日本精神が純粹な形で残っているし、外国にいるときは誰でも愛国者になりがちであるから、西欧人に対するコンプレックスの裏返しとして、黒人や他のアジア人に対する優越感（差別意識）もまた強くある。それは最近の日本の経済成長を背景

として、さらに強くなりつつある。すべての先進国、後進国を問わず、日本人は南ア連邦における日本人の地位の居心地良さにどっぷりつかろうとしている。

わたしがアメリカの友人から感じた無意識の差別感を、朝鮮の人や台湾系中国人もまた日本人であるわたしから感じたであろう。

わたしが日本人であるということの第三の意味は、わたしの母国語が日本語だということにある。わたしは日本語でものを考え、日本語で一番良く自己を表現することができる。この日本にいるときには自明のことながら、わたしが日本人であることの重要な意味なのである。たとえば、日本人同士の場合、言葉はある程度同じ意味をもっている。ところがわたしが英語で話す場合、その言葉ははたして相手にとっても同じ意味をもっているかどうか、わたしには確信がもてない。それにわたしは英語で話すとしても、頭の中では日本語で考えているのだ。この意味において、わたしは日本人以外の何者でもない。

アメリカにおいて、わたしは言葉が存在に對してもつ比重の重さに思っていた。人は言語を通して人間であるためには欠くことのできない自己確認をし（言葉をもたぬ人間が何かではありえないという意味で）、他者と交わる。言葉のハンディキャップのために自己を表現できないということとは、存在の基盤を失うのに等しいことなのである。わたしがアメリカでアメリカの友人と話をするとき、

二人のあいだにはもどかしさが常にあった。英語で話さなくてはならないわたしはつたない内容しか表現できず、そのための人間としての存在に関する劣等意識に苦しんだ。英語がその国の言葉であるアメリカでは、わたしは異邦人でしかなかったのである。これは十年アメリカで暮した人にしても、いくら英語がうまくなったといってもそこで生れた人とはちがうという意味で、ぬぐいきれない感覚なのである。

このことから日常の用を足すのさえ充分ではないままに連れてこられた被植民地の人たちは、どんなであつたらうかと想像する。アメリカから連れてこられた黒人、朝鮮から日本へ連れてこられた人たちなど。だからこの人たちが自己の復権のために母国語を習わざるをえないというのは当然なのである。小松川事件の李少年はつぎのように書き残している。死を前にして彼は朝鮮語を勉強しながら、「言葉はその国の息吹きなのだ。それは最も民族的なもの、いわば民族的な血肉といえないだらうか。それを活用するしないは大したことではないかも知れない。大事なことはそれによって私の心がその民族的なものを吸収していくことなのだ。そうしてこそ、私ははじめて自分の祖先を、祖国を、深く理解していくことになるだらう」

この文章の重さがわたしの心をうつ。言語はまた思考のパターンを型づくる。日本語は英語と比べ、非常に非論理的な言葉で

ある。それだけニュアンスに富んでいるともいえるが、あいまいな表現が多くそれで何となく解つたような気になってしまう。日本語では書いている人が良く解らないままでも書くことができ、そうなると読む方は一層解らないということがたびたびある。英語からの翻訳を読むとき、日本語では良く解らない文章が英語で読むと良く解るとするのも日本語のもつ非論理性のゆえであろう。つまり日本語は英語よりも感性的な言葉なのである。この日本語の性質が、論理的でない、ことから追いつめない、あいまいですませる、根源まで押しすすめない日本人の性格を生む一つの要因になっていると思われる。

第四に、わたしはウェットな、センチメンタルな感覚において、日本人である。たとえばニューヨークの日本レストランで、美空ひばりの「悲しき酒」とか森進一の演歌を聴いたとき、理屈抜きに「いいなア」と思い、そう感じる自分を日本人だなアと実感した。そこで歌われているのは失恋であり、別れであり、涙であるが、そうしたセンチメンタリズムに感応する自分はやはり日本人であると思つた。こうした日本人の感傷的な感覚は、しとしと雨の多い気候と、閉ざされた解放的でない人間関係からきているのではないかとわたしには思われる。

これまで、わたしは内なる日本人についての実感を書いてきた。アメリカにいて、わたしは日本人である自己を確認した。これは日

本を出るまえは意識にのぼらなかつた問題である。わたしは終戦のつぎの年に小学校へ入学した世代に属する者で、戦後の民主主義教育のもとに、西欧文明へのあこがれをもって大人になった。日本のナショナルリズムはわたしの内では本当のところ関心の外にあり、教育された部分では超国家主義として絶対悪の象徴であつた。そうしたわたしにとって、自分が日本人であるという発見は、非常な重さをもっているのである。

アメリカで旅人であり、異邦人ではかありえなかつたわたしは、一九六九年秋に日本という国へ帰つてきた。わたしはやはり日本人なのだから、日本で何かをするために。この場合重要なのは何かの内容である。わたしが日本人であるというとき、それはのんびんだらりと日本という国と一体化するという意味ではもちろんない。またわたしが日本人であるから日本のものなら何でも良いというので、もちろんない。むしろ、まったく反対に、わたしは日本人であるゆえに、自己を拠点として、日本という国家と対立しなくてはならない。わたしにとっていま大事なのは、外国で得てきた自己認識を武器として、わたしが日本人であると同様に朝鮮人でありベトナム人である他のアジアの人たちを抑圧しつつある、日本国に異議申し立てをすることなのである。



タンフェ(鈕)
【製服部図録】

ある八路军とともに

連載・その1

石井出かず子

(一)

一つの歴史の流れの中における泡沫にも等しい存在であったにせよ、東北(満州)での国共内戦の最中、そこにいた事実。

八路军の一女兵として小さな点と短かい線の足跡の中で体験した幾多のこと、交流した多くの兵士達、女兵達、ペンを執るこの手と彼等と交した暖かい握手が、そして友情が蘇える。

一九四六年五月から八月までの短かい期間であれ、動乱の中の撤退行は苦しくもあったが、学ぶことの多くがあった。

当時の軍事的情勢は、ソ連の満州撤退が一九四六年三月から開始され、多くの重工業施設が持ち出された後、蒋介石の手に長い交通線と周辺の都市が明け渡され、それを確保するために蒋介石はアメリカの空軍へ頼み、一月から四月までに四十八万の国府軍が満州、華北へ送り込まれている。アメリカが国府軍

輸送に使った金額は三億ドルを上がったと言われ、中共軍もまたもたら満州に組織されていた東北抗日軍と合流し、ハルビン地区にて「東北民主連軍」の名のもとに再編成を行なった。一九四六年五月長春南方の四平街に集結していた中共軍に対し攻勢に出た国府軍との三十三日間に亘る大激戦が行なわれ、激戦の後、中共軍は北方へ後退し、これを追った国府軍は長春、吉林を占領、ハルビンへ迫った。この時期は国府軍が優勢であったが、ハルビン地区に於て態勢を整えた中共軍は、同七月二十日毛沢東の「自衛戦争によって蒋介石の攻撃を粉碎せよ」の党内指示のもと、本格的内戦へと突入したのである。(「東洋の歴史」12・中国人民解放軍、若松重吾著より要約)

四平街で大激戦が展開されている頃、汽車で二時間足らずの西安に私はいた。当然激戦のあたりはこの西安にも及ぼし、戦況不利なのか西安の県政府関係一切八路军と共に西安

脱出となった。馬車に積まれた綿布、ミシン(根拠地が出来るとすぐに縫製工場が始められる)、武器、弾薬等北に南に移動する兵士達で県政府前の広場はあわただしい人馬の群で喧騒をきわめていた。県政府の石鹼工場にいた私は、少年兵の迎えの馬車に乗ると、三十人位の行政関係の人達や百名位の八路军兵士、三十人位の女兵達と北へ向った。南へ行く対向車の兵士達の緊張した顔に戦いが近くにあることを知った。戦乱の中を撤退する八路军の隊列の中にいる自分が、自分の意志でその隊列の一員となったはずなのに、肌から感じる東洋人としての親しさはあっても、生命を共にすると不安であったが、彼等兵士達は陽気で親切で、全て平等の立場で私に接してくれた。私は持ち前の陽性の性格が彼等の中にいつの間にか融けこんでいた。

私が八路军へ入ったのは、はっきりとした思想的なものではなく、ただ日本人居留民団の中で、醜い人々のエゴが私をどうしようもなく孤独にし、その集団の中の孤独感からの脱出が八路军へ走らせたのかもしれない。暗い十八の青春が無謀とは思いつてもこの脱出でなにかを求めたのかもしれない。終戦のとき西安城内にいた私は、支那家屋の裏庭に終戦の虚脱感とはうらはらにカンナの花がその真紅を酷熱の太陽へ挑むように咲いていたのが今も脳裡を去らない。

一瞬の静寂が支那家屋の密集したこの町を包んだ。本当に真空の数分であったような気

がした。中国民衆との主権交替のときであつたろう。騒然とした中国人達のざわめきがかどこからともなく湧きあがり、不気味な危機感となつて私を含め日本人達を焦躁へと駆りたて、そして西安城外にある西安炭礦の苦力小屋へ集結した。殺された南京虫の血で赤黒く染まったオンドルの壁を眺め暗澹とした日々が続いた。厳冬になると暖を求め南下して行く開拓団の人々の腰に巻いた麻袋の姿は棄民の群れといたい悲慘さをどうしてあげようもなかったが、石炭があるということだけは有難かつた。猖獗する発疹チフスに人々は次々と倒れ、持つ者と持たざる者の差が争いとなり、權威の崩壊が同胞と呼ばれる日本人達の連帯感までも崩壊させたのだろうか。しかし私にしろ集団からの脱出とはいへ、集団への移行に過ぎなかつたのだろうか。

四六年二月西安郊外の八路軍の駐屯地にいた私は、二十日間ほど中国農民の家で生活を共にしたが、そのときに受けた恩義は忘れることができない。私の食事から衣服のことまで家族中が心配してくれ、丹念に糊で固めた板のような布で私の靴を作り、下着を縫い、中国服の心配までしてくれた。また、八路軍の性格のわからぬこの人達は、私が県政府へ移動するとき小さな声でささやいてくれた。「生命が危なかつたら早く逃げなさい。今なら私達でどうかしよう」村はずれまで手を振ってくれた家族達……。

西安へ帰って当分これという仕事のなか

た私は総工会にいた。西安炭礦の労組の組織である。そこへ多士済々の日本人が屯しておられた。思想犯で新京の刑務所から出られた東大出の某氏、京大出の某氏、中国の大学を出、流暢な中国語を話す某氏、満映にいた日共シンパの某氏、多分解放連盟を作るための工作に集っておられたのだから。私にとってここでははじめての日本語によるマルクス主義の出会いであった。満州での解放連盟の功罪は日本人にとって色々あったであろうが、それはいずれどなたかが書かれることと思ふ。なかでも行動的に運動されていた大塚有章氏は現在も大阪で毛沢東思想学院をはじめられ、今もって節を曲げず初志を完遂されておられることに敬意を表したい。私はその頃「桑野」と言う名前であった。勿論偽名である。

二、三日馳足気味の馬車も日がたつにつれいくらか足どりもゆるくなり出すと、同乗の三人の女兵達がひとしきり姦しくなる。彼女達との交流は通化までの約二カ月間続いた。まだ高粱の背が二十糧位の平野を過ぎ、村から村へと民泊を重ね吉林の山中へと入った。やと馬車が通れるほどの道巾は戦前何かの輸送路に使われたのであろう。先頭からの馬車の轍が幾重にも重なりこの山中を蛇々と縫い続けている。樹々の間からのぞく初夏の光がときに杉の緑を鮮明に見せ、樹海の中は樹液の匂いが空気を重くし、温っぽさが軍服をとおして体に伝わる。車台の兵士が柄の長

い皮紐の鞭を振り上げると虚空に大きく円が描かれ「びしっ」とロボの背が鳴る。「ウェイ、ウェイ」と間断なく掛けられる声にロボの背の鈴が気忙しい音をたて、勢いよく駆け下る。

彼女達に慣れたとはいへ「今さら後返りもできない」そう思うと同時に悔いがふつとよぎることもあった。かたがた揺れる馬車に身をまかせ予想もしなかつた撤退行の一員となつたものの、行先の見当もつかぬ旅が心細くもあった。

同乗の三人の中の年長の崔同志は山西省出身の農民で二十五、六才だろうか、反齒の口からはじき出される早口の言葉はとどまることを知らずで、大変世話好きのお人好であったが自分の家族のことはあまり語らなかつた。若く背の高い孫同志は長い足を持余し気味に馬車に坐っていた。歩くことが好きで沈同志のファンの一人である。学生だろうか熱っぽい議論を政府関係の人達とたたかわしているのを聞くことがあった。甘つたれの李同志は三人の中で一番若く十八、九才であろうか、もと教師ではなかつたかと思ふ年輩の李同志にべつたりだったが、いざ仕事となると彼女の変わりように驚いたことがある。西安の煙草工場の係長をしていた彼女が、日本人の工具をてきばきと管理する手腕を見たときだった。女兵といっても彼女は政府関係の方に属していたが……。他の女兵達も自分の馬車へ乗れ乗れと盛んに私を勧誘してくれる。歩く兵士

達も何かと「桑野」桑野」と声をかける。黒っぽい緑色の軍服に毛沢東と朱徳の肖像のある赤いバッジを胸にお河童頭に軍帽、その下の真黒な顔、武器は手榴弾三個、どこから見ても八路军スタイルだが発音の悪い中国語は「何国人か」と宿舎の農民に尋ねられたことがたびたびであった。西安では私だけでなく多くの日本女性が看護婦として八路军の傷兵の手当をしていたが、国府軍の中でもそうであったと通化で聞いた。一行の八路军の指揮官王司令は、日焼けした眉の濃い精悍な貌に鋭い目を持ち、軍人にふさわしい体軀の持主で一行の先頭でよく彼を見かけた。

ある日民家の軒下になんとなく皆と離れて一人でいた私は久し振りの日本語を聞いた。「辛いんですか。僕は日本の大学にいたんですよ」あの鋭い目の王司令のどこにこんな隠された優しさがあったのかと瞬間警いてしまった。すたすた去った司令は何故かその後一切話しかけてはくれなかった。

一行の中で黄同志だけは私に敵意の目を向け、親しもうとはしない。延安帰りの彼女はどこかの市長の肩書を持ち、明眸皓齒と言いたい美人で、その上彼女だけが着ている黒い中国服が一層背を高くみせた。その下に何時も拳銃がある。崔同志が小さな声で「黄同志は肉親を皆日本兵に虐殺されているので、日本人に対しては敵意を燃しているのだ」と教えてくれた。局員も兵士達も私には「桑野同志、貴女が悪いのではない。日本の帝国主義、

軍国主義の軍隊が悪いのであって、民衆の貴女もやはり自分達と同じように軍国主義の被害を受けているのだから」と慰めてやれたが彼等の好意がわかるだけに胸の中にかかつきささる思いで黄同志の敵視を受けとめた。

政府関係である沈同志は唱劇の女形を思わせる眉の涼しい長身の青年だった。誰にも優しくきびきびした動作は女兵達にとって憧れの的であり、彼が横を通ると誰もが「沈同志」と呼び爽やかな笑いが常に彼の周りにあった。彼とは県政府で二晩ほど弁証法的唯物論、唯物史観等いわゆるマルクス主義の理論を日本語、中国語、筆談等で話を聞いたことがある。「新民主日本の建設」岡野進（野坂参三）の本をみせられたのもその時であった。彼は常に兵士達をリードし、合唱の口火を切った。

少し女性的な透る声は、いつの間にか皆彼に唱和していた。馬車から馬車、歩く兵士達から兵士達へと歌は流れる。歌が山に野に低くそして高く、あるときは哀調を帯び、あるときは勇壮に……単調な明け暮れの中で歌がどれだけ糧になったことか。底流している私の日本人と言う意識をときに忘れるほど彼女達、兵士達へ入りこんで行った。

東方紅も良く歌ったが中でも「松花江」と題された哀調を帯びた流浪の歌はたびたび唄われ、私にも愛唱歌の一つとなった。

我が家は満州松花江のほとり、森あり林あり炭鉱あり。

大豆、高粱も山野見渡すかぎり、我が家は満州松花江のほとり、我が故郷はそこにあり。老いたる父母もそこにいます。九・一八、九・一八、かの惨たる時より、九・一八、九・一八、かの惨たる時より、

我が故郷をのがれ出てたり。愛する父母を見捨てたり。

満州事変によって満州を逐われた張学良の東北軍はその後北京、天津地区に駐屯していたが南京政府の対日譲歩政策のために張学良はいったん下野外遊した。やがて外遊から帰った張学良は西北剿匪副司令として西安で再び麾下の東北軍を指揮することになった。紅軍討伐の第一線に立たされている東北軍は従前、半独立の状態にあった満州時代と異なり、きわめて給与も悪く、装備もまずしく尾羽うち枯らした状態となっていた。しかし彼等は故郷をはなれてすでに数年、故郷をうばった日本に対する憎悪の念はきわめて激しいものがある。彼等は紅軍と戦うことより、日本と戦うことを望み、そしてまた蔣介石の南京中央政府に対する反感が鬱積していた。その頃彼等のあいだに唄われたもの悲しい故郷を恋うる歌である。このもの悲しい歌はまず東北軍の中で愛唱され、やがてそれは盛り上がる抗日風潮の中で全中国の知識人の中にひ

ろまり一世を風靡したものである。(中央公論社「世界の歴史」15より)。

樹海の中の旅は三日続いた。谷間の集落は一種の山寨である。大きな材木で頑丈に作られた柵は少々の外敵を防ぐには十分な堅固さで、大門が開かれ中に入ると湿地帯が少し平地になっていて、水草とも稲ともつかない三十程ほどの草が細い道の両側に群生し小川が流れていた。夕暮前の一刻先に着いたロバが車からはずされ盛んに嘶く。五十軒ほどの部落の人達が戸口ごとに出迎え、子供達は次々と入る隊列に歓声を上げながらついてくる。

夕映えがこの山一帯を茜に染め低い煙が民家から流れる。小川ではてった足を冷していた三人はさすがに疲れたのか黙っている。私も黙って陽の落ちるのを眺めた。西安を出てから十日以上はたつたろう。その間敵(国府軍)に出合ったのは西安を出て二、三日目に飛行機(偵察機)に一機出会ったきりである。私は馬車の下から空を眺めていた。たいして恐いとも思わなかった。

山の中の食事は高粱粥か玉蜀黍粥に油を油でいたため岩塩で味付けしたお菜で三日続くといささか嫌になった。水のかわりに高粱粥と玉蜀黍粥の上澄みを飲んだ。軍規、軍律は厳しい、しかしかつての日本軍の厳しさとは違う。民衆に対しての「三大規律八項注意」はよく守られ男女間の問題も私のいる間は決して間違ったことはなかった。「学習、学習、再学習」のスローガンのもとに討論や学習が

活発に行なわれ、少年兵達の意見もあり、闘いながら学ぶとはこのことだろう。

やっと平野へ出ると町や村の壁に文革の大字報のように「何々の勝利」と書かれても、昨日は中共の手に、今日は国府に、明日はまた中共と争奪戦が繰り返されるのだから民衆にとっては随分とまどうことだろうと思いつながら勝利の字の横を通り過ぎた。

□

政況の關係で吉林へ出ず南下した一行は、約一ヶ月半振りに瀋江へ出た。越えて来た山山から発した川がここで二手に分れ、どちらも最後は鴨緑江へ流れ込んでいる。その山峡の谷からやと出たばかりの町は呼蘭と言う。木材の集散地らしく、木の香と川からたちこめる霧がまばらな町並を包み、馬車の軋む音が重い。早朝出発だったのでここで小憩したとき、どこかの村で合流した部隊の一部が前線へ行くらしく、私達と反対の方向へたつて行った。川巾はだんだん広くなり岸の柳の緑も日毎に濃く、陽射しも本格的な夏になる。

幾人かの女性達と馬車から飛び下りると川へじゃぶじゃぶと膝まで入り、思い切り水の中へ頭をつっこむ、石鹸など無いのだから洗ったというより濡らしたにすぎないが、冷たい水は生気をとる戻すほど気持ちよく、何度も何度も顔を洗った。歓声をあげて女兵達と水のかけあいをする。歩いている兵士達が盛んに声をかけてくる。楽しい交歓のひとつとき

あった。濡れたままの服は歩いている内に乾いてしまふ。

ほとんど雨を見ることのない大陸の夏は、全てが干ききっている。幾日も歩き続ける道は、馬車を通り抜けるたびに土煙が舞上り、頭から肩から真白になる。青い空から避けようもない太陽が容赦なく照りつけ、道の両側の高粱が白っぽく土埃を被りぐんなりとしている。行けども行けども高粱畑だ。ときに葉に照り返る陽が目にも痛い。強いて隊列を作るでもなく歩く兵士達の布靴も私の布靴もくたびれてきた。三人の女兵達との馬車から降りて歩いたのは、どこかの小さな村で合流した他地区の行政関係の人である或る女性同志と知りあったからだ(名前を忘れてしまった)。二十七・八才だろうか、短かい髪の似合う優しい顔にどこか知性を感じる落着いた態度は、多分指導的立場の女性だろう。私とあまり変らぬ小柄な体を後へそり気味にゆっくり歩き、馬車に乗っている彼女をあまり見たことがない。何かのきっかけと言っても私が日本人であることを知って声をかけてくれたのだろうかと思うが、黒い軍服の彼女と歩いた最初の日何故彼女が後へそり気味に歩くのかを知った。彼女は身重なのだ。夫君はこの東北のどこかで戦っているかと淡々と語ってくれた。何んでもない風に微笑む彼女の顔に滲む汗を見たとき、私は深い感動を覚えると共に那辺にこの強靱な精神力が培かれていたのかとあらためて考えさせられた。幼い顔の少年兵が一人

いつも彼女の後についている。私は姉のような親近感で彼女が一行の中にいる間、行を共にして歩こうと思った。当時の国共内戦の本質的な対立の原因をよく把握できていなかった私には、その時の判断は無理でもあったが、しかし自分の目で見、そして心のふれあいの幾多がその後の私の人間形成の上にとだけ影響され熟成されていったことか。

一九三四年十月中央ソヴィエト地区の江西省の根拠地を捨てた十萬の紅軍が総行程二萬五千華里に及ぶ長征をおこない陝西省北部に新たな根拠地を作った西遷は試練と苦難の連続であり、あの金沙江の渡河、瀘定橋の奪取、大雪山大草原の踏破、中国現代史の中でそれを知った私は、あの大陸の黄土の道を一緒に歩いた女性同志のことを思った。長征に於て女性に一人の落後者もなく目的の根拠地へ着いたことは、彼女のような女性同志であったろうことを現在に至って、その培われた強さの原因を知る思いがした。彼女とは瀘江で軍と行政関係とが別行動をとりそれぞれ出発する時、私は女兵達と別れて小さな町で十日間ほど彼女と行を共にした。彼女はこの町で赤ちゃんを生むためにアジトとも思える入り込んだ民家の中の一軒へ住むことになったが私はその後幾人かの行政関係の人達と通化へ行くことになり途中で別れた女兵達と合流した。彼女が赤ちゃんを少年兵に抱かせているのに会ったのは通化の貿易公司以、日本へ私が帰る日の真近い初秋のある日だった。

呼喚を出発して幾日目かまだ馬車に乗っていた私は自分が敗戦国の日本人であることを真から思い知らされる場面に出会った。日蔭もなく埃の舞上る道の両側にうずくまるように坐っている国府軍捕虜達の無気力な顔々、その大部分が終戦後国府軍から武装解除を受けそのまま国府軍へ入った元日本軍兵士達であることを知ったとき、打ちのめされるほど無惨な気持をどうすることもできなかった。私は日本人から逃げ出した。しかし日本人だ、慣れ親しんだ八路軍兵士の中であまりにも善意に包まれていただけに距離をおいて自分のおかれた場と言うものを考えていなかった。

それだけに独り空洞におき去られたような痛みを抱きながら馬車につかまっていた。戦に於て勝者があれば敗者がある。この場合八路軍の兵士達は勝者の立場で通り抜ける場であるが私はなんだろう。声も掛けることの出きない私は卑怯なのだろうか。馬車から下りることもできない後めたい気持のまま彼等の隊列の中を抜け出した。置かれた立場は違っても私も同じ敗戦国の日本人であり侵略戦争へ大なり小なり協力の形は示してきたはず、複雑な思いを独り自問し続けた。

瀘江までの幾日かの道は大きな流れの川に沿った平坦な道であった。途中道祖神を思わせるような小さな祠に出会うと沈同志はかならずそれに石を投げるので、どうしてかと尋ねると「封建的なものは無くさねばならぬ」大変真面目な顔で答えてくれた。あるとき、

けたたましく泣き喚く白装束の一群を先頭に沈同志が無然とした顔で馬車から眺めていた。瀘江では二日間休養をとることになった。町はずれの馬車の運送人達の泊る細長い家で真中に土間があり両側のオンドルの壁に教室のような硝子窓がある。寝ころぶとアンペラの冷たさが頬に気持よく伝わる。表の方の窓からは道をへだてて川が光って見え、裏手は馬を繋ぐ厩舎があり大きな味噌甕が一個おいてある。皆と同じように長いままの葱を粒の荒い味噌をつけてむしゃむしゃ食べる私に「桑野は山東人みたいだ」と女兵達が笑っていた。

何んでも食べてやろうの精神旺盛な私は、彼等が食べるものは何んでも食べた。長い旅の中ではじめて出会う町らしい町並は飯店や屋台の呼び込みが喧騒をきわめ生き生きとした生命を感じようだった。二日目は三人の女兵達と池堂へ行く。何しろお互いに何か月も入浴していなかったから手で垢出しをしてもらったら体重が半分くらいになったようである。背中を風が通り抜けるようだった。舟型の浅い浴槽は一人が寝てはいるセメントの粗末なものであったが三人の女兵達は子供のようにしゃぎまわっていた。虱のわんさつといった下着をまた着る。皆平気な顔をしている。私も慣れてはいるが……。ある日、ある村の民家の低い木々に少年兵達がそれぞれの上官の白い下着(?)を洗ってずらりと干していた。真夏の太陽の下、続々と縫目から這い出た虱

が胡麻をまいたように散らばって、はじめはそれが何かわからなかった私は、わかった瞬間吹きだしてしまった。青い空、太陽、緑の木々、白い布の小さな黒点の群、実に自然だな……と感嘆も交っているのである。場所は地平線をのぞめる平原であり、硝煙の匂いもなく畠に農夫の姿も見える。滬江のそれぞれの宿舎で一息ついた一行は前にも書いたように、中共の統治下にある通化へ行く行政関係の人達と前線へ行く兵達と別れた例の三人の女兵や兵士達とそれぞれ握手で再会を約し別れた私は、数人の行政関係の人達と身重の女性同志と滬江からあまり遠くない小さな町へ行ったが、その貿易公司以西安一の資産家の息子で日本の大学へ留学したこともある面識のある中国人に会った。戦前の彼を知っているだけに中共の一機関で働く彼を見たときお互いに驚いてしまった。この町から久方振りに汽車に乗る。どこまで運行できるかわからないが、行くところまで行くらしくごくのんびりしたもので、一行中女性は私一人である。一時間ほどして着いた駅で、どこかかと乗って来たのが十日前に別れた八路軍兵士達で実際にぎやかになる。崔同志が相変らずまくしたて、それぞれの兵士達に言葉を交すのに私も忙がしい。中国人は実に銜舌家で一つの国民性だと思ふ。日本人なら根負けしそうな

姦しさだが、文化大革命で討論の積重ねにより問題の是非をきめる手段は実に国民性に叶っている。勿論毛沢東思想の基本路線の上に

成りたっているのではあるが。明日は撤退と
言う前夜、総工会の大会での白熱的な討論や、
学習会の対話のやりとりししろ、謙讓の美德
を教えられてきた私には常に言葉の襲来のよ
うで圧倒されたものだ。

馬車がどんな風に運ばれたのか知らないが、
次の駅から以前のように歩くもの、馬車に乗
るもの、もとの隊列で通化へと出発した。通
化は盆地の中にある都会で戦前の通化省の政
庁であった建物は軍艦のように横長い五階建
のビルで、通化地区の政治の本拠となってい
る。一行のうち行政関係の人達と女兵達とが
その建物の一部へ泊ることになり、兵士達は
学習を受けるために通化郊外の二道江へ行く。
女兵達も二・三日遅れて二道江へとたち、私
と西安の県政府の人達だけが残ってしまった。
ここでタイピストとして働く阿季文に紹介さ
れたが、彼女は日本人で私より一才年上だが
何故か私とはあまり語りたがらない。日本人
同志と言うためか。五階の彼女の部屋で当分
一緒に寝ることになったが、その部屋たるや
八畳の広さに元日本人巡查の携帯していた権
力の象徴であるサーベルが山の如く部屋一杯
に積んであり、その片隅に事務机が二つよせ
てある。そこで寝むとのこと、ごろ寝には慣
れていてもいささかサーベルの山には度胆を
抜かれてか、一晚中サーベルの乱舞する夢に
魘され、翌日はその部屋で寝むのを止めてし
まった。次の部屋は集會室にでもなりそうな
かなり広い部屋で、ガランとして金属製のロ

ッカーが二個転がっている。その上で寝るこ
とにしたが、又してもその夜は生汗をかきほ
ど魘されて、とうとうその部屋からも逃げだ
してしまった。私と阿季文の二人以外は無人
の部屋ばかりの五階は、森閑として自分の足
音にも身の竦む思いであった。魘されたこと
を阿季文に言うと、ポツンと「それはあたり
まえよ」と後は黙ってしまったので私は次を
聞かざるを得ない。無表情な彼女が「通化事
件知っている？通化の日本人男性のほとんど
が連行されて、この部屋に押し込められびっ
しりつまっていたそうよ。銃殺された人もい
るの」彼女の大胆さには驚いたが、因縁を聞
かされた私は背筋が冷たくなり、西安からの
県政府の人達のいる一階へ逃げ出してしまっ
た。

当時通化におられた人達は事件の内容をご
存知と思います。私も概略は知っておりませ
ん。阿季文は東北に降り
解放後、瀋陽の大学へ入ったことを日本に帰
って数年かして耳にした。数日して李同志が
二道江の兵士達のところへ行くから一緒にと
誘われ飛びたつ思いで馬車に乗った。脆く赤
黄い土の盆地は湿度が多くどこからともなく
流れてくる水で細い溝があちこちに見受けら
れ、葡萄の栽培の盛んな土地である。二道江
の兵士達の宿舎はもと日本の農学校か何かの
教習所の跡のようで、ここでは現在盛んに言
われている「思想で武装する」教育が毎日行
なわれ一ヶ月位すると又前線へ行くらしい。

あの撤退行で唄った懐しい歌が聞える。黒板に大きく弁証法的と書かれてあった。教室へ入ると言葉と握手で身動きができない。両の手を兵士達にあずけながら、あの顔、この顔、

連載第七回

ある満蒙開拓青少年義勇隊員の記録

—— 第二部 その4・内原訓練所の生活 ——

新 舟 亥三郎

昭和十三年

四月十二日(火)晴

午前中は土木作業。八時半より土木班集会所に集合。ふるた先生に指揮され、一小隊は東練兵場のそばにある松の根子を、栄養本部の後に運んだ。たいしておごと(1)ではないと思っただけ、いざ仕事にかかってみたらそうとう肩にきた。なりたけ(2)大きいのを運んでくれとのことだったが、はじめのうちにはみなすぐに大きいのを運んだが、運ぶ回数が多くなるほど、みな小さいのを小さいのをと運ぶようになった。これは、われらの欠点だと自分は思う。 1中略1

午後は写真をとった。自分の氏名を書き、胸に吊るし、一人一人ばちばちととっていった。今後必要の場合に面くらわなためだろ

皆知った顔だ。涙が出そうになり自分が何を言っているのかわからない。

兵士達の「再見」の声に送られてここを出る。女兵達が何時までも手を振っていた。か

う。ますます重大なことを感じる。

四月十三日(水)晴

けさも渡満する中隊を見送った。どこの者で何中隊だか少しもわからない。そうとう秘密を守るらしい。東京においても汽車へ乗った以上面会なんかさせないという。水野閣下(3)の訓示によると、もっと出発のさいには落ち着いてもらいたい、とのこと。やっぱり萬歳、萬歳の声に見送られると、たれしも心は躍るらしい。自分の出発に臨んでは充分落ち着きの態度をとりたいと思う。

午前中はチブスの予防注射をした。みんな痛いと思ったがやってみたらたいして痛くなかった。女の医者と男の医者と二人でやった。ブツリとさし、スーと薬を入れた。午後は静

たがた揺れる馬車に身をまかせながら彼等と再び会うことはないだろうと思った。長いようて短かい旅であり、私に何かを教えてくれた人達だった。

かに休めとの命令だった。これは幸いと思いい宿舎へ帰ってきた。そのうちにだんだんと手が固まるようになり痛くなった。手も上がらないようになってくる。中隊長も「熱の出る人は寝てもよい」といった。まさかそんなことはないと思っただら、時がたつにつれて(手が)重たくなってくる。

きようは一円金を下げてもらった(郵便貯金)。五十銭は小久保さんに借金をなし(4)三十銭は写真代金に、残るは二十銭。これで薬書などを買おうとまた元の一文無になる。実際こんな金をもらってないことは珍しい。これがまたいいのだと思う。磯田(5)や家へ手紙、写真を送る。

四月十四日(木)晴

午前中は静養だ。きのう予防注射をやったので手の痛みがあるためだ。この暇(時間)をごく有意義に使うのはどんなことをして暮らしたらいいだろう。手紙を書くのも悪くはないだろうけれど、手紙を書くのは今のところ金がかかるから。けれど半日くらい過ごすのはまったく夢のようだ。自分は蒲団を干そうと思っただけ、洗たくし場へ干しておいた。とてもよく乾いた蒲団に寝るのはとても気持ち

がいい。そのうえからだのためにいい。たびたび干すといふと思う。

午後の日課は武道だという。とても手が痛くてできないと思つた。けれどほんとにやつたのだ。木刀を持つたらとても痛い(手が)だらうと思つたけれど、それほどでもない。やっぱり一度持つてみれば、もうなれるから平気だ。きようは小林先生ではない。体験済みだからそうとううまいと言われた。
今夜の点呼は七時半、明朝四時半に起床して渡満部隊を送るのだそう。

四月十五日(金)晴

ドドン——という起床太鼓(6)に起こされ、急いで飛起きた。まだよく目がさめない。蒲団をたたみ顔洗いに二十二中隊の炊事場の所へ行つたけれど、あまり混雑しているので、山形県の人の洗う所へ行つて洗つた。(ここは)混んでいないのでゆっくりと洗えた。四時半起床だったので(朝の)空気がみなぎっている。ゆうべは雨がうんと降つたらしい。けさも渡満部隊を見送つた。もう四回ぐらゐなる。みんなりっぱな態度で出発した。

午後は、面会所(7)の裏から味を作る所までの道路を作るのだ。これもただ形を作ればいいのではなく、木の根子や葉を運びそれを並べ、その上に土をかけて作るのだ(8)。そうとう疲れたけれど、そのあとの気持は、まったくたれにも想像できない。

きようは、煙草を吸つたという者が、すご

いやられ方だ。(9)やっぱり悪いことをしておけば、いつしかそれがばれて結局だめなんだ。毎朝朗読(10)する「各モ各モ一上ニ神ノマジマスコトヲ忘レザルコト」にもめる通りだ。つまり、かげひなたの行ないは絶対に慎むべきものだ。

手紙を印刷したのが小鹿野(11)の印刷所から送つてきた。百枚あつた。まったく、なんとお礼申していいのかわかりません。真剣にやれよ。

四月十六日(土)晴

きようは一日中作業だった。管門の所へ架橋するのだ。どんなぐあいかわかるといへば、一つの櫓みたようなのを作り、それによつて大きい杭をぶつ(12)のだ。はじめ上つたときは、とても危いようだったけれど、なれるにしたがつて平気になつた。

午前はおかしな帽子をかむつた前田先生が指揮したのだ。いばるのかと思つたら、とてもおとなしい(方だ)。仕事の要領を(よく)教えてくれた。午後は先生が来ない。教える人がいないからとて、おだをあげたり(13)して仕事をやらせてはならない。こんなときこそ熱を入れてやらなくてはいけない。それはたれしも知つてのことだけれども、実行するのはなかなかむずかしい。自分も反省してみるにあまり上等ではなかつた。

ヨイサ というかけ声はいいけれど、そのくせ手(のほう)はなかなか動かない。面

■ 中途での感想

第七回目の記録を書き終えてふとバックナンバーをみたところ、第一回は一九六八年三月なのに改めて驚いた。四年目に入つているのである。しかも進みぐあいのほうはさつぱりで、今回よりやく内原生活にさようならするところまで書きあげたわけである。

この分だと六年先の昭和昭和十八年十二月、わたしが義勇隊の生活から兵隊として入営するまでこぎつけるには、かなりの時間が必要となるだろう。

山崎さんのご活躍ぶりと正比例するように研究会がますます充実発展していることを知つて、わたしはたいへん喜んでいる。それだけに毎号貴重なスペースを占領しているわたしの記録が、はたしてどれだけの価値を持つのか、わたしはこのへんでもう一度自分自身の来し方をふりかえり確かめてみたいと思つると同時に会員の方々から卒直なご意見をきかせてもらえれば幸いである。

会人などが多勢くると(通ると)、つい目をそのほうに動かすことがたびたびだつた。また三時半のマントのとき(おやつ)、少しいやしかった。夢中で食べたようだつた。警備の人も笑つていた。こんどは注意しよう。

兄からの手紙 四月十四日付

何時も元気で勉強していることと察します。家内一同無事ですから御安心下さい。次に

ハガキ百枚印刷して送付致しました。本日(十四日)中に小鹿野町文正堂からお前宛発送するはずになっております。近く出発の様子ですが、ますます精励いたし初志を貫徹せられるよう祈ります。新聞のニュース切抜お送りいたします。これを見て如何に満蒙開拓青少年に力を入れているかがわかることと存じます。ちょっとお知らせまで

十四日夜 兄より

弟へ

(姉あて四月十六日付発信の手紙)

こんにちは。

桜の花も、はや散ったことでしょう。こちらは一昨日ごろが満開らしかったです。村へ出ないと桜は見られません。姉さんにはその後元気の由安心いたしました。自分も毎日元気で訓練を受けています。もうここへ来てから一月の余たっているのです。

中略

姉さんは暇をとって家へ帰るようなことをききましたか……長く奉公していた浮田さんの家を出るのは辛いでしょうが、おれのような者が出たため家へ帰らなければならぬとなつて、かんべんしてください。運命です。満州まで行って働かなくとも、いくらかも食っていけるだろう、と凡人は思っています。しかし、それはただ個人的考えで今の日本の情勢は満州へでも発展しなけ

ればならないんです。国のためなら死すとも可なり、というのが真の日本人だ。その日本人になって初めて忠にもなり、またほんとうの孝にもなるのです。だから、まあがまんしてください。それだけに自分もしっかりやろうと思う。きょうも家から手紙が来ましたが、その中に義勇軍のニュース(新聞)が切抜いて何枚もはいっていたのをみると、出発して宮城前にて萬歳を叫んでいるところだとか、本隊を五千名送るようなこと(記事)がありました。そのほかのこともありましたが……中略!

朝早く渡満する人を楽隊の音で送るのはなんともいえない気持ちになり、つい涙が出てきます。自分たちもあんな場面もあることを思うと、早く渡満したいような気がします。服装はみな同じ。国防色で桜の徽章です。靴はズックのあみあげ靴、靴下、リュックサックなどみな同じものを身につけて出立するのです。自分たちも帽子と服が支給されないだけで、もう十一品も渡されま

した。自分たちの行くのは「沙蘭鎮」というところだと思ふ。二十二中隊を三つに分けて「……」「鉄驪」「勃利」というところへ行くのです。自分たちは先遣隊だからいい。もしおくれたら本隊だったろう。

やがては満州の野にも理想の農家を建設するのだ。いつかはきつと楽しい時期を訪れよう。一時も早く訪れさすのがわれわれ

のつとめなんだ。

もう家のほうも忙しい時期が訪れてきますねえ。麦も大きくなり、馬鈴薯も作ったり、いろいろの種をまく時期となり、やがては蚕を飼う五月も近づいてくる。われわれは一時も油断はできないような境遇に今いるのです。一歩ふみはずしたら国の名にかかわるのです。

大君のために一身を捧ぐわれわれですから少しでもりっぱな人にならなければなりません。では、あまり長くありませんからこいらで。健康に注意してください。

サヨ一ナラ

弟より

姉上江

四月十七日(日)晴

けさは風呂当番を仰せつかったので起床し点呼へも出ずすぐに風呂場へ行った。起床すると頭が痛い。これはいけないと思ったけれどがまんして行った。小鹿野の横田君も来てひっぱして(14)くれた。ありがたい。おそく行った自分をうらむ。なかなか穴が(風呂桶の)小さいので(水が)出ない。ようやく出てしまったので(こんどは)水を入れ始めた。なかなかたまらないものだ。(15)火もふつたて(16)た。石炭なのでとてもいやな匂いがする。頭の痛いおれにとっては、余計頭にさわった。けれどがまんはこことだと思つてやつたら、「種痘や身体検査をやるから

すぐ来い」というので（そのままにして）行った。

はじめはホウソウ（17）だった。三人お医者さんがいた。当番勤務者は早くやるため別に小隊を作った。男の人（医者）はうんと切る（18）ので血が出た。女の人（医者）はうんと切らなかつた。これではお風呂へ入っていけないというので、風呂当番はこれを取りやめとなった。仕方ない。

午後一時からは身体検査をやった。内臓器管と、おかしきことには陰部なども検査した。みなおかしかった。（19）また目の検査もやる。

四月十八日（月）晴雨晴

起床して驚いたことには汗びっしょりだった。一時驚いたが、よく考えてみれば悪くはないんだ。汗がみんな出てしまえば頭痛もいくらかはひくだらう。けどまだまだ頭は痛かつた。大隊礼拝へもやつと行った。舎前で唱歌をうたつたときは（20）まったくなにかなんだかさっぱりわからない。（しかし）このくらい（のことなら）がまんできると思つて、できうるかぎりがまんした。

朝食後少し休憩してからチブス予防注射をやつた。こんどは二度目だから余計痛いという話だ。自分ら頭の痛い者何名かは体温を計るからと言つて早く組についた。病院へ行つたら「おまえは帰れ」というので、これ幸いと帰つてきた。そしてすぐ床をとり、寝た。

いつか眠り、目が覚めてみるとご飯らしくみな食器を出してた。もう夕飯（なのか）と思つた。めんくらつてしまった。が、よく考えてみると昼飯だ。自分には食べられない。もどすようで食べられないんだ。少しいただいてやめた。午後もし休養だという。みんな寝たりごろごろしている。このひまに手紙でも書こうと思ひ、ヒロ（21）へ書いた。人參アメを送つてもらつたからそのお礼のためにと思つて。

夕飯はオカユを食べようとしたが足りないというのでよしした。一食ぐらい食べないつたつて死にはしないだらう。すごい風が吹いている。故郷のほうはどんなだらう。

四月十九日（火）晴

けさ大隊礼拝へ行つて感づいたことだが、思わぬうちに人数の減つてることだ。四大隊の集合場所も変わつた。一中略一きょう一日じゅう暇が出た。齊藤君と洗たくをしに行つた。もうぼつぼつ始めないと渡満のさいにまごつくからなあ。隣の益三君と川端の英夫君（23）などに手紙を書いた。

きょう新聞に出ていた埼玉三百二十一名が、二十六日出発、左の如し、として自分の名ものつていた。二番めに。家でもわかつたことだらう。

※当日、実家では県庁から村長あてのつぎの文書の写を受取つていた。

十三社収第九、二四〇号 （原文のまま）
昭和十三年四月十五日
埼玉県学務部長

上吉田村長殿
満蒙開拓青少年義勇軍渡満日時ニ関スル件

首題の件別紙二三一名左記日時ニ依リ渡満ニ決定致候条關係方面ニ御通知相煩度追而途中駅ニ於ケル見送り其他ハ可成質素静肅ニ且ツ饑別品ノ如キハ手拭、靴下、手袋等ノ如キハ可ナルモ食糧品ハ絶対ニ遠慮セラレ度由ニ付申添候
猶東京駅着ノ上出発時間マデノ間ニ皇居遙拝、明治神宮並靖国神社等参拝ノ行事アリ併為念

記

- 内原発 二六日 前九時二〇分
 - 上野着 〃 前一時二四分
 - 東京発 〃 後二時三五分
 - 下関着 二七日 後一〇時頃
 - 釜山着 二八日 前六時半頃
 - 安東着 二九日 前五時頃
- （名簿）
第四大隊第二十二中隊第一小队（五八名）
秩父郡三沢村 荻原 宥 俊
〃 上吉田村 新舟 亥三郎
〃 久那村 大久保 昇 平
〃 野上村 川 辺 広 一
I 以下略

四月二十日(水)晴曇

一前略

きょう大隊命令がきて、何かに捺印するらしいので、午後の教練を少しやって(途中で)帰った。自分らは沙蘭チンへ行くと、間違いない行きまず、との誓いだ。二十一中隊(23)と同じ所だ。二十一中隊に負けず、しっかりやらなくては埼玉の恥。ひいては国家の恥であると思う。

ここは(24)とても景色のいい所だ。菜の花も一面に青い麦島に黄色に浮かんでいる。

(きょうは)日用品、カップ、歯磨粉、石けん、ちり紙、手拭と制服、制帽をいただいた。しっかりやらんくてはいけない。こんなありがたい物をいただいたんだから。

今夜は久しぶりでお風呂へ入った。気持ちいいや。

四月二十一日(木)晴

けさしがた、三時半から四時半までの不寝番(25)で起床するのが少しいやなようだった。(終わって)一時間ばかり寝ているうちに、いろいろの夢を見たことはなほだしい。なんの夢だったか忘れたが故郷の夢だった。

けさの大隊礼拝は映画におさめた。みなしっかりやった。拍手もよく揃う。きょうの午前中も洗たくだった。きょうは服や地下足袋を洗ったので、みんな制服や制帽を身につけ、もうすぐ荷物をつくれるようにしておいた。

蒲団や毛布もついでに干す。

午後は作業だった。どんなことかというところ、各中隊の舎(26)の回りを監視して金物類を見つけて歩くんだ。そして第一倉庫の所へ運ぶ。今は鉄の必要時代だ。その鉄がそっちこっちに散らかっていることは、国家の不経済だ。

だからそれを捨てるのは、金をうんともうけてやろうという気ではなく、鉄を捨てて奉仕しようという気でやるのは必要(大切)だと思ふ。

家からと磯田君から手紙が来た。写真も着いたらしい。けれどけち(27)に写ったよう

(四月十九日付 兄からの葉書)

お手紙二回正に拝見いたしました。

何時も元気の由何よりです。印刷手紙も着いたようですが、文が簡単に気に入らぬかもしれないが悪からず。

写真も拝見したが、ずいぶんお前も古くつつたね。ダブダブの作業衣らしく……：……：家内中無事、兄さんもきょう限りで焼きを終えました。暇があったら重ちゃんへもハガキ出しなさい。喜ぶことでしょう。

草々

(磯田君からの葉書 四月十九日付)

長々ご無沙汰いたしてまことに申しわけありません。その後君も丈夫ですか。ぼくも、だれもみな丈夫で一心に勉強し、また働いております。

君が懐しい母校を後に村民全体の歓呼の声に送られつつ門出をしたのも、今からちょうど一月前です。

君は幸福だった。ものの十日や二十日前に(学校を)出たからといって、そなたは勉強のほうへは影響はなく、出征兵士のよう送られ、そのときの君の顔まだ、まざまざとまぶたに残っております。君のあのとときのあいさつ、実にりっぱで堂々たるものでした。自分は一生を通じてそのことは忘れられません。

君が行ってから間もなく(同級生も)思い思いのところへ行きました。川口市には、(28)十二人も行きました。

もう桜が満開だが、きょう(二十一日)は朝から雨だ。そして十時ころから雪になった。四時ころになってやんだが、まだ雨は降っている。今夜は作次さん、次郎、雄三、銀次、槌之助君に書いたのもう十時半だ。ぼくらが前にお世話になったヘンミ先生に動員がきて十二日午後一時四十分、万年橋を君と同じように出征します。では御身たいせつに。途中でくじけないで一心にやってください。

サヨウナラ

四月二十二日(金)曇

午前中は松林へ行っていろいろと話をした。中隊長の言うことには、現地へ渡るについてはどうしてもそらとうの覚悟がなくてはなら

ない。きつとみんなも銃を執って起つことがある(にちがいない)。兵隊の弾薬はわれわれの手で運び、前線もおれたちで守るといふような覚悟で十分に精神を固めてもらいたい。汽車に乗るとき、乗ってから、また上陸するようなどきのいろいろの注意をしてくれた。一車輛へ七十人くらい乗り、少しも怨をあげてはいけないうことだ。話の終わったあとと相撲をとった。内地における最後の相撲だろうと思う。一生懸命やった。十一時半に帰り昼飯にする。

午後は自分の物品(私物)の整理整頓と教練だった。渡満ももう間近になったんだ。東京大行進も歩調のほどが合おぬようになったら、それこそ義勇軍の名誉にかかわる。ひいては国の恥だ。

高野先生の指揮で方向転換やその他の行進教練をやった。渡満の日も近いのは近い。しかし精神はまだ遠くにいる。それでいいと思う。少しもあわてず、作業にでも出かける気持でいくさ。

四月二十三日(土)曇

けさも渡満部隊あり、四時半に起床して見送った。そして八時まで手荷物づくりをやった。二つか三ついっしょにしてそれを弧で包む。もうこのままで満州まで行く(届く)んだ。かなりよくしぼっておかないと途中でほどけるようなことのある場合はいけない。自分は青木さんといっしょにしてもらった。

縄かけもよく指導してもらい、だいたいよく作れた。できた梱包を新築の中隊本部へつめ込んだ。片づけてこんどはリュックサックの備品検査、そのうち雨が降ってきた。

こんどは内容証明書を書いて先生のほうへ出した。税関を通過するときに必要なのだそう。午後は四大隊集会所において講話を聞いた。とても眠かった。どうしてだか、いけないことだ。四時すぎだ。帰ってきて行進の練習をやった。なかなか揃わないものだ。校長先生とツネ姉上からの手紙が来た。

(校長先生からの葉書 四月二十一日付)

来る二十六日愈々勇躍御出発の通知に接しました。その後益々元氣旺盛の事と存じますが、何卒自重自愛悠々迫らず、飽くまで大成を期せられるようお祈りします。

今日夕方、君の兄さんに逢いに行きます。そのとき君に贈るべく作った国旗を差上げ、君に御届けしてもらおうつもりです。今度わが村からも千鹿谷の坂本仁平君が志願しずでに手続きを終わりました。たゆみなく(三字不明)を勧めております。

上吉田小学校

新井嘉久

四月二十四日(日)晴

きょうは午前中運動会だった。競走と武装競走と騎馬戦だった。自分も競走の選手として晴のグラウンドで充分に戦うことのできたの

は喜ぶべきことであると思う。幸いに第一予選を二番で通過し、決勝は三番だった。

昼食後内原駅まで手荷物を運んだ。そうとう肩にきいた。とても今日は暑い。水泳でもやりたいような気がした。中隊長の訓示に「自分たちはまだまだ成っていない。同じことを何度言われても実行できない。埼玉県人の恥だ。上官の指揮を待つのももちろんいいが、已れがまず自分の心を引締めねばならない。」

きょうは家からとその他の人から手紙がうんと来た。話によると、家から兄さんが上野駅において面会するとあった。ありがたいうとだけれど会えるだろうか。多勢だから(会えるか)どうかわからない。おれは夢のようだ。会えるだろうか。会えないだろうか。一つの疑問とするところである。

また姉さんから(二人)も手紙が来た。写真も送ってくれた。面会のことがかかる。(姉(トリ)からの手紙 四月二十二日付) 桜の花も散り果てて初夏の気分がいくぶんか味わうことのできるころとなつてまいりました。

いよいよおまえたちも出発の日が間近くなってまいりましたね。故郷を出てよりもはや二カ月近くなりましたね。その間、お前にはどれくらい鍛錬と修養とができたか、きつと見違えるほど変わったことでしょう。姉さんも嬉しく思います。

行き届いた訓練を受けて皇国のために堂
堂と渡満できる身となった弟を見たいよう
な気もするけれどそれは決してなりません。
渡満してわが国のために、あるいは満州国
のためにきつときつとりっぱに働いてくだ
さること信じております。

いったん故郷を離れたからには、きつと
成功して再び錦を飾って帰ることもできる
ことだろうと思っております。お父様やお
母様もきつときつとその日の来るのを楽し
みに待っております。老齢とはい
えまだ丈夫な体を持つ父母なるが故に、
決して心配するにはあたりません。おまえ
に代わって姉さんがきつとめんどろみであ
げるつもりですからご安心ください。

おまえは、おまえとして尊い責任をもっ
てひたすら君国のためにお尽くください。
そして、たびたびよきニュースをお父さん
やお母さんにお知らせください。

国が変われば気候も変わることと思うか
ら充分体に気をつけて病気などせぬように
して働いてもらいたいです。それから写真
真(29)は姉さんが写真屋から持ってきて
送ります。これは姉さんがこんど写したの
だけけれど、とても下手にとれた(30)ので
よそうかと思いましたがおまえに一枚送り
ます。笑ってはいけないのよ。姉さんはこ
ういう不恰好な人間だと思って見てくださ
い。

ではこれくらいにして。父母のことは心

配せず、姉さんも近いうちに帰りますから
どうか充分体に気をつけて君のためにお尽
くください。船酔いをせぬように気をつ
けてください。

ではお大事に行ってください。

さよーなら

姉より

弟へ

(姉(ツネ)からの手紙 四月二十二日付)

一前略一 月日のたつのは早いものです
ね。お別れしてからもはや四十日あまりに
なりましたね。来る二十六日に渡満の出発
とのこと、お体に気をつけて、渡満されて
からはなおさらのこと、勇気百倍、覚悟を
きめて出てからはいかなる事があっても、
くじけないようにお願いですよ。

気候も変わった所へ行くので何となく気
がかりのようですが、いろいろ予防注射を
したり、ほうそうをうえたり(31)したと
のことですから安心しました。どこにいて
も健康が第一ですから、充分体に注意して
病気にかからないようにね。

それから父母のことは心配することはあ
りませんよ。必ず達者でいるからね。トリ
姉も三月いっぱい暇をとって家事に従事
するとのことですが、まだ次の代わりの人
が見つからないとのことですよ。

五万道の鍋さん(32)なくなりました。
きのう(二十一日)。二十二日に公会堂で

ごふこう(33)をするそうです。

それでは御身体大切にね。 さよなら

姉より

(同封された姪ヒロの手紙)

イサニイチャン

オテガミアリガトウ。ニイチャンモマン

ジュウヘイクトノコド、オカラダヲタイセ
ツニネ。

サヨナラ ヒロ

イサアニへ

(姉(なか)からの手紙 四月二十三日付)
ただ今はお書面ありがとう。姉さんこそ
ご無沙汰してすみません。出発以来おまえ
元気とのこと安心いたしました。私方一同
無事に暮らしていますからご安心ください。
心配してくださる希夫の腫物も全快し丸々
と太ってきました。夏にでもなったら写真
でもとって送りますよ。

実家のほうでもキン姉さんの所にも別状
はありませんから安心して渡満なさいね。
そして一日も早くりっぱな人間になってく
ださい。お父さんやお母さんもそれを待っ
ているんですよ。乱筆にてお返事まで。お
体はくれぐれも大切に。 さよなら

(兄からの葉書 四月二十三日付)

いよいよ二十六日出発の由、お目出とう。
当日は上野着午前十一時四〇分にて皇居遙
拝、明治神宮、靖国神社参拝いたし、午後
二時三十分東京駅発の由、県から通知があ

りました。

また学校から日章旗を贈られましたのでおまえに手渡すべく、当日は私が上野駅で待っておりませうから、おまえもよくよく見つけながらたのみませう。余は面会の節に。

四月二十五日(月) 雨

あすは渡満だ。それなのにきょうは舎内当番である。そのうえ雨が降る。渡満部隊があるというのに見送ることもできない。残念に思った。自分たちの出発のあす雨が降ったらどうだろうか、ということを考えて、(きょうの出發に)同情される。

舎内当番で便所くみだ。考えようによつては不平にも思えるけれど、これも役目だからしかたはない。

午前中は加藤先生の訓話(34)があった。どんなことかという、訓練所で支給された以外のものは食べるな。東京駅でうろたえてはならない。(35)仲よくしろ、という訓話だった。いかに先生がおれたちのことをお考えになっているかということが察せられる。しっかりやらなくてはいけない。

午後は一時ころからお風呂へ入った。そして後、汽車へ乗る順序をきめた。自分らは第五車輛なんだ。夜は早く寝た。あすということがあるから。

(兄あて四月二十五日付発信の手紙)

お手紙拝見しました。お便りによります

と上野駅で面会するそうですね。嬉しいのは嬉しいけれど上野駅で面会は不可能なのです。そういつたって、この手紙はもう間に合いませんが、もし東京で会えなかった場合(のことを心配して)誤解の生じないように通知するのです。上野駅では乗り替えるらしいのです。よくわかりませんが：

中隊長に「上野駅で面会できないし、家へ電報でも打つたらいいでしょうか」と聞いたら「先生が埼玉の面会人は、時間のあったときは東京駅のホームで会ってもらいます、と大きな声でどなってやるから、電報なんか打たなくてもよい」というので別に沙汰はしない(36)のです。自分たちは第五番めの車輛に乗るのです。なんだか面会は一つの疑問(心配)なのです。みんな服装は同じだし、時間もなし、会えたら幸運です。

この義勇軍は少しも動じない、というのが目的で(モットーにして)出發します。見送りに萬歳々々と見送られても、ちゃんと坐って挙手の礼をすることになっていきます。そこが義勇軍なんだと。

一カ月余の訓練を終えて渡満する自分にとっては、家の者に会って渡満したいのは山々なのです。もう三年乃至五年は会えないのだから：考えれば長いようなもの、必ず(しも)長くないことと思えます。その間、自分も一生懸命やります。できうるかぎりやるつもりです。

渡満もあすだ。内地の生活も今夜きりだ。考えてみると、ある種の深い深い感じに打たれます。さっき、汽車に乗る順や行進の順序を決定しました。少し見つけづらい(37)かも知れません。面会のことか気にかかります。会えるか会えないかの問題です。会えないとしても、いろいろの事情があるから悪しからず思ってください。たぶん会えるだろうと思えます。

現地へ渡ってからまたいろいろと珍しいことを通知します。みんなの話(手紙)によると、近ごろ応召兵もあるようですが、兄さんは変わったこともないと思う。逸見先生なども応召の由、一時驚きました。

事変(日支事変)も相変わらずやってくるらしいですね。ここにも近ごろになって毎朝新聞が配られました。

きのうは益之君や木下君、半納の鶴吉君、それから小鹿野の姉さんから手紙と写真、長留の姉さんからも手紙をいただきました。この手紙も内地における最後の手紙だと思えます。小隊別に異った場所に行くので、今はもうみんな挨拶なんかしたり、まったく感慨にむせています。一、二小隊は沙蘭鎮(38)へ、三、四小隊は鉄驛(39)へ、五小隊は残っていて五月中(旬)ころ鉄路自警村(40)へ行くそうです。

もう今夜は休むのでこのくらいで。今夜の礼拝は内地最後なのでみな緊張し、植民の歌(41)と露營の歌(42)を合唱し、最

後の晩です。

東洋平和のためならば、なんで命が惜しかろう。ではこのくらいで。

御身大切に。 さようなら

弟より

兄上様

■注

○文章かっこ内の文は、意味不分明な点を補足したものである。

○文中かっこ内の数字の順序によってつぎのとおり注を加えた。

1 おごと・苦勞の意。

2 なりたけ・なるべくの意。

3 永野閣下・内原訓練所最高幹部の一人。

4 借金をなし・返済したこと。

5 磯田・同級生。

6 起床太鼓・朝の起床の合図に鳴らす太鼓。

7 面会所・内原訓練所正門近くにあった。

8 道路作り・田んぼのまん中に道路を作るので、一種の埋立作業に似ていた。

9 やれ方・叱られ方の意。

10 毎朝朗読する・当中隊長の指導により

四句誓願と四つ訓を朗読した。

11 小鹿野・隣り町、現在の小鹿野町。

12 ぶつ・杭を打ち込むこと。

13 おだをあげたり・冗談を言いふざける意。

14 ひっぱして・栓を抜き水を捨てること。

15 なかなかたまらない・浴槽がずば抜けて大きいので満水になるのに時間がかかった。

16 ふつたてた・火をたきつける意。

17 ホウソウ・種痘の意。

18 うんと切る・種痘のメスの切り口が大きい意。

19 おかしかった・このばあいは恥ずかしかったとの意。

20 舎前で唱歌を……志気を上げるため宿舎の前で歌う合唱のこと。

21 ヒロ・姉の長女。

22 益三君、英夫君・郷里の遊び友だち。

23 二十一中隊・鹿児島県出身者で編成の中隊・同じ日に渡満し現地訓練所は同じ。

24 こは・内原をさす。

25 不寝番・一時間交替で一晩中だれかが起きていて隊員の就寝状況や警戒に当たった。現地へ行ってからもずっと実施した。

26 舎・日輪兵舎と称する円型の宿舎のこと。

27 けち・よくうつつっていたの反対。いわゆるケチンボの意味ではない。

28 川口市には・川口の鋳物工場のこと。

29 写真・内原入所を前にして兄と姉と三人でうつつした記念写真のこと。

30 下手にとれた・よくうつつっていない意。

31 ほうそをうえたり・種痘をする意。

32 五万道の鍋さん・部落内の屋号と人の名。

33 ごぶこう・葬儀の意。ご不幸からきたの

34 加藤先生の訓話・渡満する訓練生に必ず言ったこと。「丈夫で、仲よく、迷わずに」である。

35 東京駅でうろたえるな。出発にさいしては落着いて気品のある態度をとれ、といていた。窓をしめ全員挙手の礼のまま

で東京駅を発った。

36 沙汰はしない・打電しないと意。

37 見つけづらい・混雑が予想されるので発見しにくい意。

38 沙蘭鎮・大訓練所の一つ、のちの寧安訓練所。

39 鉄驢・大訓練所の一つ。

40 鉄路自警村・満鉄経営の訓練所

41 植民の歌・内原生活で朝な夕な歌った歌

満洲開拓を象徴する歌である。

42 露営の歌・軍歌ではあるが行進のさいなどよく歌われた。

■紹介

このほど出た『軍国主義 東南アジアの教科書にみる日本』(B6版・合同出版・五八〇円)は、東南アジア諸国の歴史教科書より、太平洋戦争の部分を選んだもの。日本人の太平洋戦争観の甘さをするどくえぐる書物であり日本人必読の書と言って過言でない。また、在日朝鮮民族教育問題懇話会編『教科書のなかの朝鮮』(B6版・地歴社・三五〇円)は、日本の教科書を分析したもの。

差別とたたかう若者たち

— 在日韓国教会の集会から —

山口明子

八月はじめ、恵那峡で開かれた在日大韓基督教会の青年たちの集会に出席した。八十名余りの出席者のなかに日本人は講師も含めて六人。日々の何気ない会話の端々にすら私の同胞である日本人が、今なおこの人々を

含む在日朝鮮人・韓国人に対して平然と差別を行なっている事実が次々に明るみに出されて、顔をまともにあげ得ないような思いに、四日間しばしばとらわれた。

「他人の足を踏んでいるものには、踏まれている者の痛さを本当に理解できないのではないだろうか？」という問いかけが今回の会の中でも、日本にある韓国人・朝鮮人の教会と日本の教会との共同の問題をめぐって発せられたが、この人々の訴えの切実さを考えるとき、日本人である私が、この会について何か語ることは、たいへん憚越な、

心ない業のようにも思われる。けれども、同時に、この会の中で語られたことの中に、一人でも多くの日本人とともに考えてほしい問題も多く含まれていると思う。

在日大韓基督教会は日本に住む韓国人・朝鮮人のキリスト教会（プロテスタント）であり、三千人余りの信徒がいる。信仰を同じくするものの共同体であると同時に、民族共同体として、この教会は日本における六十年の歴史を民族の運命とともに歩んで来た。（註1）。ある時には教会は国を失なった民としての慰さめの場所であり、また独立運動へのエネルギーの育まれる場所であった。日本キリスト教団と合併し、苦難の時をすごしたが、戦後は分断された国家を背景として教会は朝鮮の名を捨てた「大韓」の名を採るようになったが、これについて、

「今も一つの誤ちとみる若い層の見方もある（註2）。

この教会も今は日本生れの二世、三世が構成メンバーの大半を占めるようになり、ことに今度の会合は青年たちの会合なので二、三世がほとんど。ギターを携えて来た何人かを囲んで、自由時間ともなればあちこちで歌声が起り、どこでも見かける若ものたちの姿だった。だが、一度、語りはじめると彼らの問題意識はするどかった。

「教会の反省と展望——差別社会の克服にむかって」が会の主題であったが、彼らにとつてキリストを主とすることは、そこにおいて民族の誇りを回復し、差別されている同胞とともに、抑圧と戦って行くことを意味する。差別社会の実態、家、入管体制、職業、教育などについての話がこれをよく示していた。たまたま私の出た教育の分野で次のようなことが話された。在日朝鮮人六十万人のうち学齢期のが約十五万人。うち民族学校で教育を受けているものが四万足らず。残り十二万足らずは日本の学校で教育を受けて

いる。ところが、日本の公教育の機関においてどのような扱いがなされているかは、先般「朝日ジャーナル」誌上に紹介された大阪市立中学校校長会の差別文書事件にも、その一端がうかがわれる通りである。日本の学校に入学するに当って、「日本人生徒に迷惑をかけるような行為はいっさい致しません」と、日本人の保証人運署の誓約書を要求された時の屈辱のある人は語った。またある人は、「私たちの同胞が十二万も学んでいるのだから」、在日朝鮮人が半ば近くを占める地域の学校に教員として就職したいとのぞんでいた。しかし、日本の教員免許を持つ彼女を規則は受け入れないのである。日曜日に教会に集まる子どもたちは、週日の日本の学校では「安心していられない」と告げている。（註3）

この園に生活するこれらの子どもたちが、民族の誇りを取り戻し、安心して住める社会を作り出すために、日本人のだれが「責任がない」のだろうか？

註1. 「日韓キリスト教交流史」
註2. 「和解」七〇年二月二十五日号
註3. 在日韓青年会「燈台」一九号